

大学

2023 年度
「卒業生満足度調査結果の検討」

大学院

2023 年度
「修了生満足度調査結果の検討」

大阪電気通信大学

教育開発推進センター

Center for Educational Development(CED)

目次

大学

大学全体：集計結果.....	3
2023年度「卒業生満足度調査結果の検討」	5
工学部	
電気電子工学科	6
電子機械工学科	9
機械工学科	13
基礎理工学科	15
環境科学科	16
建築学科	18
情報通信工学部	
情報工学科	19
通信工学科	21
医療健康科学部	
医療科学科	22
理学療法学科	25
健康スポーツ科学科	26
総合情報学部	
デジタルゲーム学科	27
ゲーム&メディア学科	28
情報学科	29
共通教育機構	
人間科学教育研究センター	31
英語教育研究センター	33
数理科学教育研究センター	34

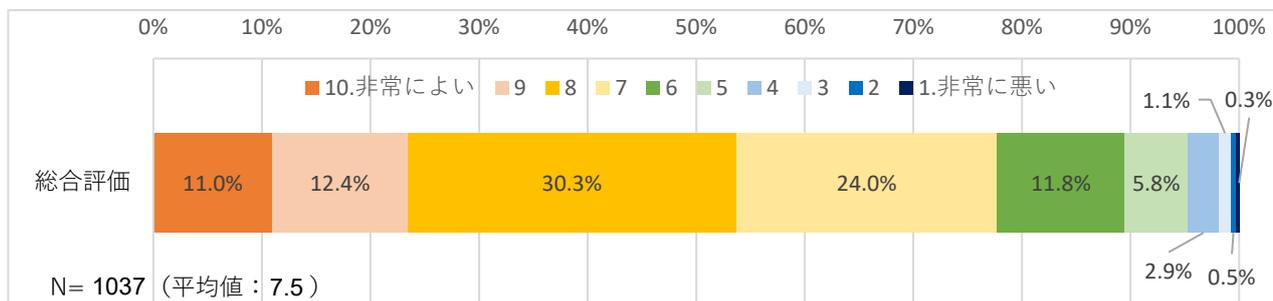
大学院

大学院全体：集計結果.....	37
2023年度「修了生満足度調査結果の検討」	39
大学院 工学研究科	
先端理工学コース	40
電子通信工学コース	41
制御機械工学コース	42
情報工学コース	43
建築学コース	44
大学院 総合情報学研究科	
デジタルアート・アニメーション学コース	45
デジタルゲーム学コース	46
コンピュータサイエンスコース	47
大学院 医療福祉工学研究科	
医療福祉工学専攻	48

2023年度 卒業生満足度調査

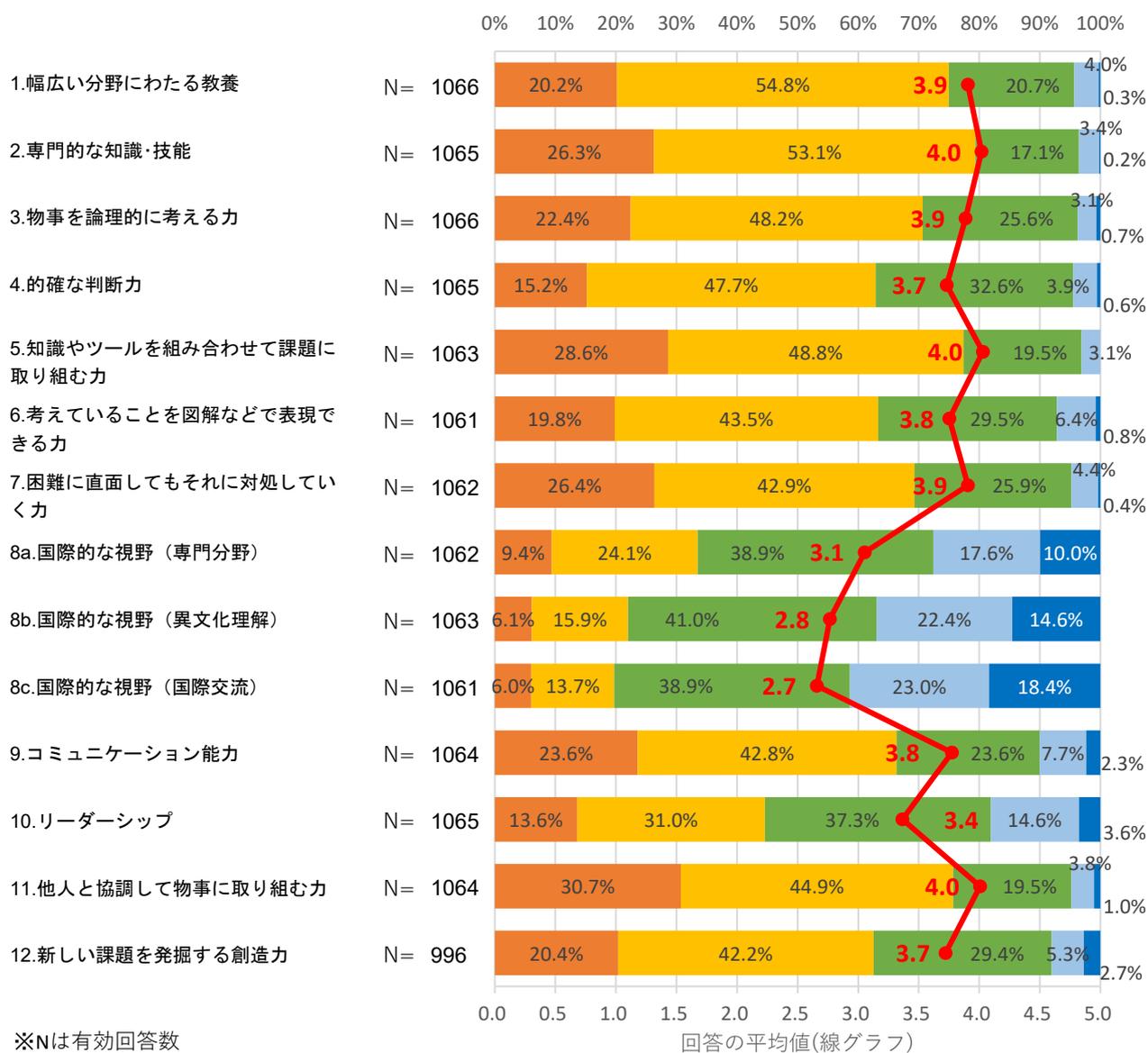
大学全体：集計結果

◆あなたが本学で経験した教育について、全体として考えて、総合評価を1～10の10段階で評価してください。



■ 5.十分獲得した ■ 4.ある程度獲得した ■ 3.どちらとも言えない ■ 2.あまり獲得していない ■ 1.獲得していない

選択肢別の割合(棒グラフ)



2023年度 卒業生満足度調査

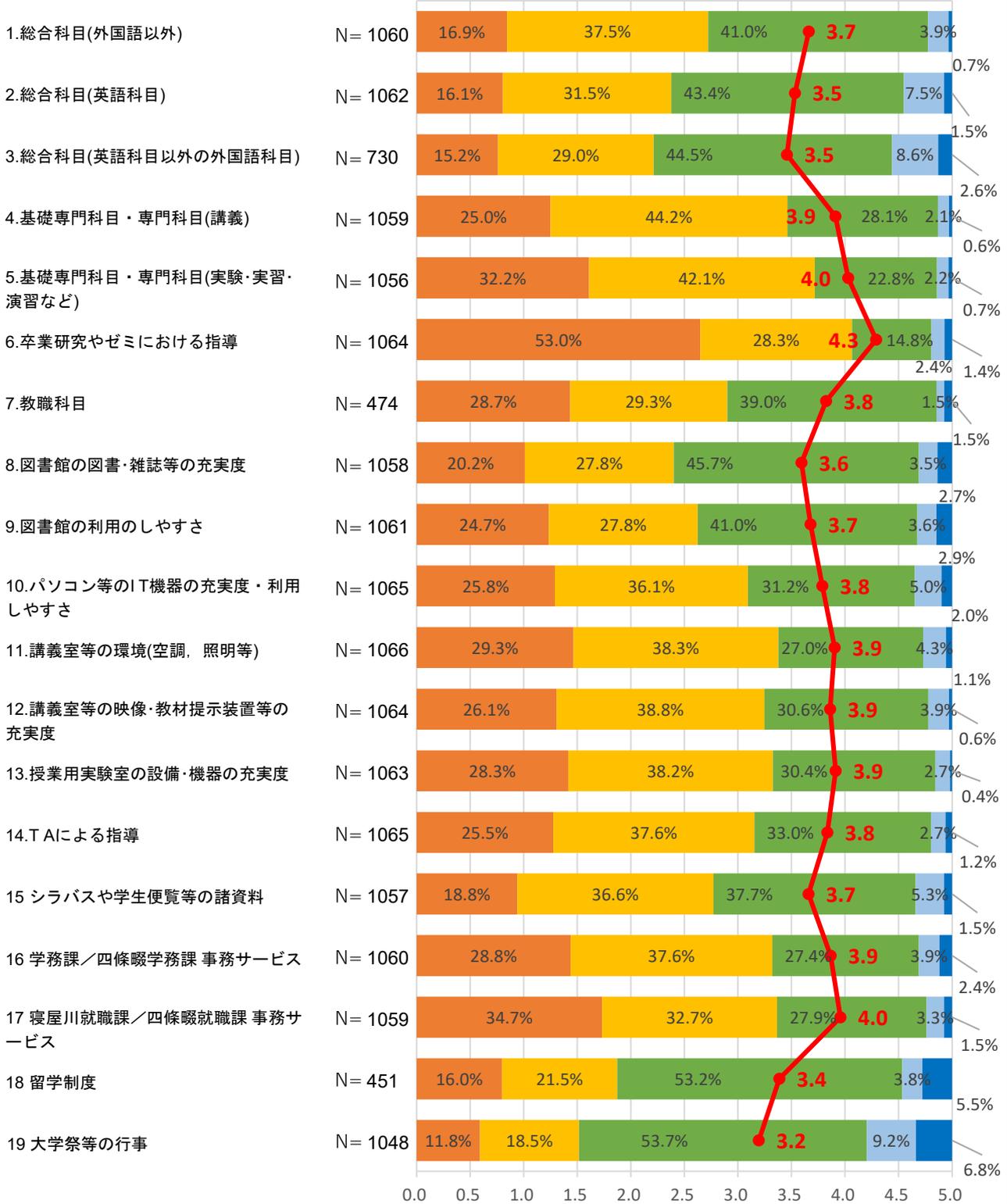
大学全体：集計結果

◆本学での生活を振り返り、以下の授業科目群や教育設備・機器などについて、全体的に評価してください。

■ 5.よかった ■ 4.ややよかった ■ 3.ふつう ■ 2.やや悪かった ■ 1.悪かった

選択肢別の割合(棒グラフ)

0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%



※Nは有効回答数

回答の平均値(線グラフ)

大学

2023 年度

「卒業生満足度調査結果の検討」

2023 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2024 年 6 月 12 日
工学部電気電子工学科
2023 年度主任 富岡 明宏

設問ごとに回答を整理し、検討した結果を以下に示す。

選択式設問

[A] 本学での大学生活をとおして、あなたは次のような知識や能力などをどの程度獲得したと思いますか？

電気電子工学科の教育で修得してもらいたいと考えていた、

「専門的な知識・技能」

「物事を論理的に考える力」

「知識やツールを組み合わせる課題に取り組む力」

「困難に直面してもそれに対処していく力」

に対して、昨年度に引き続き高い評価を得られた。さらに、

「他人と協調して物事に取り組む力」

に対しても、昨年度同様に高い評価を得られたので、キャリア科目にも力を入れて学生の就職力を向上させる本学科の教育方針が学生に浸透していることが確認できた。今後も、しっかりと教育していくつもりである。

一方、

「国際的な視野」

「リーダーシップ」

に関して評価が低い。前者については 1 年次のキャリア科目の中で英語を使ったグラフを読み解く力の実習などを行っているが、より踏み込んで英語で発信する実習などを今後検討する必要があるかもしれない。だがそもそも英語に苦手意識を持つ学生が多数であり、「リーダーシップ」を引き出す実習も行なっているものの、「獲得度」という指標で学生がすなおに自己評価すると、自己肯定感が少ない、という結果になっていると考えられる。プロジェクト活動科目等を通じて、学生自らが積極的に行動するよう誘導する手法を検討する必要があるだろう。

[B] 本学での生活を振り返り、以下の授業科目群や教育設備・機器などについて、全体的に評価してください。

大学教育で最も重要である「卒業研究やゼミにおける指導」に対する評価は、一昨年より改善されていた昨年度とほぼ同じ水準を維持できた。コロナから回復し、研究室に出てきて行う卒業研究が実質的に積極化している表れであろう。今後もしっかりと卒業研究を指導する必要があることを実感した。

また、

「基礎専門科目・専門科目(実験・実習・演習など)」

「授業用実験室の設備・機器の充実度」

も、改善されていた昨年度と同じ水準を維持でき、高く評価されている。学生が専門科目の重要性を理解し、それに応えられる教育が行えていることが分かる。今後も専門科目の教育を充実し、社会のニーズに応えられる教育をしていく。

一方、

「T A による指導」

の評価はやや低く、これはコロナの影響で 1 年次から遠隔授業が主だった結果と考えられる。現在は対面授業を中心に、T A による丁寧な個別指導を受けられるので、年齢の近い T A が学生目線から受講生の質問・疑問に直接答えられるようになっているので、今後のアンケートでは改善されると期待できる。

[C]あなたが本学で経験した教育について、全体として考えて、総合評価を1～10の10段階で評価してください。

設問[A]、[B]の合計平均は昨年度とほぼ同じであり、その結果、全体としての評価である設問[C]の平均も昨年度とほぼ同じである。教育に関する満足度を上げるため、各項目に関して検討する。

自由記述設問[D]

学位記授与式において、十分に時間を取ってこの欄を記載してもらった。下級生の大学生活を良くする効果があるので自由記述も多くの意見を積極的に書いてほしい、と促した結果例年以上に181件の記述回答が得られた。1～3年生までコロナの多大な影響を余儀なくされた学年だが、予想に反してコロナの影響に関して否定的な意見は5件程度であった。それ以外の実質的な大学での学びについて突っ込んだ意見が得られて、教員側も広く受け止めて今後の改善に生かしたい。内容が多岐にわたるので、いくつかの問題点を整理して、今後の対応を記載する。

満足している点

1. 獲得した知識や能力について

「電気関係の知識が増えた」「考える主体的な学びができた」など大阪電気通信大学独自の学びを称賛する声が多数。

→単に基礎事項を記憶・学習するだけで終わりではない。学んだことを、自らの将来にどう役立てるかという実践的な観点から、自分の総合力・応用力を高め、より高い段階をめざす視点が素晴らしい。

2. 教育設備・機器などについて

「図書館が充実している、私立大学らしく設備が充実、ゼミで色んな機械が使えた」など、大阪電気通信大学の設備を称賛する声も多数挙がっている。

→上位の大学に期待される充実した設備が本学に存在すると認め、学生の勉学・研究活動を有効に支え、有益な学園生活を送れたことが示唆されている。

3. 教育指導に関する項目

「自分が判らないところを真摯に対応していただき、解決策のアドバイスもしていただけた」「各教員はやさしく丁寧に教えてくれた」「教授やTAは質問に快く、丁寧な答えを返してくれた」「電気の知識に乏しい私にもわかる内容から授業を始めてくれて、理解しやすかった」

→TAの対応や授業時間外でのサポートに対する感謝が多く、今後も継続して学生の質向上をはかってゆきたい。

4. 学務・就職関係

「ゼミや就職課など就職活動に関してのサポートが手厚かった」、「目標をもって就職活動に自分から取り組みめた」「先生方・就職課の方々に就活の時に色々な話やアドバイスが就活に活かすことが出来た」

→本学の手厚い就職活動に関してのサポートを評価し、感謝する声が多い。

5. その他

「自分のやりたいことを実現するのに最適な学校だった」、「年齢に関係なく話せる友人と出会えた」「おなじ趣味、考え方を持った人たちと知り合えた」、「他の学生と交流できるキャリア系の科目を通じて様々な意見を取り入れることができた」、「意欲的に学ぼうとしている学生に、とても手厚く指導していただけた」など、本学に在籍することで自己実現ができる点は、本学の大きなメリットとして今後も宣伝して行きたい。

満足できなかった点

1. 情報伝達に関する項目

「コンセントぐらいは全ての席に付けたらいかがでしょうか」、「講義で使う施設や器具の新調」「WiFiのログイン不調」「マイポータルが重い」

→パソコン必携化が進む中で、多くの教室では机ごとにコンセントがすでに配備されている。まだ設置されていない机もあるのか、確認が必要だろう。他の施設についても検討をお願いしたい。

2. オンラインでの連絡事項

「マイポータルだけでなく、teams や Gmail でも告知を行ってほしい」「OECU メールを含めメール連絡がギリギリ過ぎる」「たくさんの情報がメールで送られてくるが、関係ないものはもう少し除外してもらった方が確認しやすい」、「出席システムが使いにくい」、「行事の連絡が遅い」

→事務手続きオンライン化の進展・合理化について、再点検が必要かもしれない。

3. 授業に関する項目

「数学に割く時間が少ない」、「必須科目の重要性をもっと説明してほしい」、「授業内容が重複している」、「授業レベルにバラツキがある、極端に難しい内容のものがある」

→工学部ではどの授業の提出課題にも数学の学力が要求されるので、1年生から専門科目として「電気数学」、およびその補習として「リメディアル数学」を行っている。特に後者は、数学の力が足りないと自覚する方に自由意思で参加してもらっているので活用していただきたい。内容的にはこれで十分だと思う。

→「必須科目の重要性」については、春の進級時期にまとめて説明している。

→「授業内容が重複している」ことは当然のことである、むしろこれによって復習ができて次の発展的な授業へスムーズに入っていけていると感じている。理解レベルの高い学生さんには不要でも、授業についてゆくのやっとの受講生には福音となっている面が多い。

→「授業レベルにバラツキがある、極端に難しい内容のものがある」というのも大学の授業では当然のことであり、現状では1年生の授業は中学高校の知識からスムーズに入っていけるよう、極めて易しく設定しているが、2～3年になるに従い、急速に大学レベルの専門科目となり、その変化についてゆくのが困難かもしれない。また3年生後期から4年生にかけての授業は、本来の大学後期の授業となっており、課題をこなすのに相当な勉強が必要であるが、これも大学学びの本来の姿であると考えている。各授業ともTA配置など、十分なフォロー体制を取っていると考えている。

4. その他

「3D プリンターなどの加工機を研究以外でも(課外活動でも?)使えるようにしてほしい、有料でもいい」

→3D加工センターから研究室宛てに毎年春に課題募集して、課外活動でも参加できる体制となっている。利用可能性のある、学内組織・団体にも広報する必要があるようである。

「資格の単位認定の方法を詳しく説明してほしい」→3年生進級時に、再度履修計画等について詳しく説明する機会を設けている。資格取得後に科目認定の方法がわからなくなった場合には、他の受講生は学務課で質問して解決している。

全体を通して、今回の卒業生満足度調査での意見を参考に、改善策を検討していく予定である。

2023 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2024 年 5 月 10 日
工学部 電子機械工学科
2024 年度主任 入部 正継

[A] 本学での大学生活をとおして、得た知識や能力

2022 年度と比較してポイントが下がったのは

8b 国際的な視野:異分野理解 2.6(-0.1)

12 新しい議題を発掘する想像力 3.7(-0.1)

であり、両方とも-0.1 ポイントの下落となった。

一方、残りの13項目は0.0~+0.2 ポイントの上昇となった。また 4.0 ポイント 以上は 2022 年度には 1 項目であったが、2023 年度は 6 項目となり、大きく増加していることが確認できる。実際にポイントが増えた項目は

1 幅広い分野にわたる教養 4.0 (+0.1)

2 専門的な知識・技能 4.2(+0.2)

3 物事を論理的に考える力 4.0(+0.2)

5 知識やツールを組み合わせる力 4.1(+0.2)

6 考えていることを図解などで表現できる力 3.9(+0.2)

7 困難に直面してもそれに対処していく力 4.0(+0.2)

8a. 国際的な視野(専門分野) 3.2(+0.2)

9 コミュニケーション能力 3.8(+0.1)

11 他人と協調して物事に取り組む力 4.1(+0.2)

である。また、合計平均では 2022 年度と比較して+0.2 ポイントとなった。

[B] 本学での生活を振り返り、授業科目群や教育設備・機器

全体的には 2022 年度と同ポイントとなった。ただし、4.0 以上は 2022 年度は 5 項目であったが、2023 年度は 6 項目に増加している。

特に専門科目に関連する項目である

4 基礎専門科目・専門科目(講義) 4.0(+0.1)

5 基礎専門科目・専門科目(実験・実習・演習など) 4.3(+0.3)

6 卒業研究やゼミにおける指導 4.2(+0.1)

のポイントが高くなっている。この傾向は自由記事術欄からも読み取ることができる。

また、設備に関する項目では

10 パソコン等の IT 機器の充実度・利用しやすさ 4.0(±0)

11 講義室等の環境(空調,照明等) 4.0(+0.1)

12 講義室等の映像・教材提示装置等の充実度 3.9(±0)

13 授業用実験室の設備・機器の充実度 4.1(+0.1)

のポイントが高い。

[C] 本学で経験した教育についての総合評価

2022 年度の 7.5 と同ポイントとなった。総合評価で6以下と評価した 61 名中の14 名(全体の 23%) が全体の評価を引き下げている。一方、総合評価で 7 以上とした人数は 47 名(全体の 77%)であることより、満足度が高い学生の数も多い。

■自由記述 (件数)

【良かった点】

友人増えて学生生活楽しい 10

卒業研究 9
設備が充実 8
専門知識が身に着く 7
教員が良い 4
資格とりやすい 3
実習の授業 3
3DCAD の資格 2
学外のプロジェクト等に参加 2
学生実験 2
就職課のサポート 2
学務課の対応 2
自由工房 1
サークル活動 1
課外活動 1
異分野協働の授業 1
キャリアをイメージできるようになった 1
TA の指導 1
コロナのため特に書くことがない 1

【改善すべき点】

大学からの連絡(情報伝達)が遅い 17
学務課の受け答え 3
自販機を増やして欲しい 2
専門が広いので知りたいこと以外が邪魔だった 1
オンライン授業だと質問しづらい 1
全教室に電源コンセント欲しい 1
学生の意見を取り入れて欲しい 1
研究室の個室化 1
施設の使用条件が難しい(3D センタ) 1
授業の難易度に差がある(専門が急に難しい) 1
コロナで設備を使ってないので学費を返して欲しい 1
このアンケートこそオンラインでやってほしい 1
必修科目は一つの曜日にまとめて欲しい 1
J号館とY号館の間の移動時間がかかる 1
大学院進学に必要な書類の説明が分かりづらい 1
実習授業でTAが少ないと質問できないまま授業が進み分からなくなる 1
レポートの手書きがシンドイ 1
MyPortal が重いときがある 1
必修科目が難しかった 1
学生一人一人に理解できているか確認してほしい 1
教員一人当たりの業務量が多すぎる(授業資料に不備がでるくらい) 1
机と椅子の座り心地が悪く集中できない 1
図書館の蔵書は学生のリクエストに応じて欲しい 1
課題の解説は資料配布でなく講義で説明してほしい 1
試験前に資料や本を読むことが必要なので、そういう指導をしてほしい 1
ウオシュレットじゃないトイレがある 1
研究室がオープンスペースなので個人情報の漏洩リスクが高い 1
教員に連絡したら必ず返事が欲しい 1
図書館に一般誌を増やして欲しい 1

【役立った/印象に残った科目】

電子機械演習1・2 13
 メカトロニクス基礎・実践・創成演習 10
 CAD基礎・応用(新関) 8
 卒研 5
 ロボット工学(入部) 5
 コンピュータリテラシー1・2 4
 製図(演習の一つ?, 田中) 3
 コンピュータ工学 2
 材料力学2(新関) 2
 電気回路・電子回路(月間, 小川) 2
 電子回路(小川) 2
 電磁気学(月間) 1
 CAD 工学(新関) 1
 工作法(田中) 1
 高電圧変電工学 1
 材料力学(全般) 1
 材料力学1(入部) 1
 電気回路2(月間) 1
 メカトロニクス応用数学(入部) 1
 Advanced English(松本) 1
 英語リーディング(松田) 1
 発達心理学(平沼) 1
 スポーツ実習 1

【大学への要望や提案・感想】

【要望】

事務連絡が遅い, 早めにしてほしい 2
 他学年との交流 3
 サークル情報を詳しく知りたかった(コロナの影響) 2
 施設の利用方法をまとめて記載してほしい 1
 スポーツ施設の充実 1
 コンビニの商品を増やして欲しい 1
 キャンパス間を越えた交流 1
 コロナで大学に来てないので大学で何ができるかを知ったのが3年後半でもう少し早く知りたかった 1
 TAがいる講義は理解し易かったが数が少ない, TAと教員では手が足りない 1
 部活動をする学生を増やすべき 1
 A号館の研究室の作りは良くない, 騒音も換気もひどい 1
 遠隔授業の時期は交友を広められなかったので大学のサポートが欲しかった 1

【感想】

研究室での先輩や教員とのコミュニケーションが良かった 7
 楽しかった 2
 CADについて学べてよかった 1
 コミュニケーション能力がついた 1
 全体的な活気不足 1
 社会に出るための力を得ることができた 1
 自主的に活動する機会に恵まれ, 経験を積むことができた 1
 単位を3年までにとれていれば卒論に集中できる 1
 自主的に活動できる, 困ったときに質問ができる, という環境が整っている 1
 幅広い工学をまなぶことができた 1
 実際に使われる具体例を出す講義が良かった 1

Slack や LINE による授業の質問システムがよかった 1
他人と強調して物事に取り組むことができよかった。他にもより多くと会話する環境が欲しい 1
4 年間お世話になりました 1

【総評】

2023 年度卒業生は 2020 年度の入学が大半を占める学年であり、Covid-19 の感染拡大の影響を最も受けた学年である。学部の1~2年の授業を混乱の中で遠隔授業に対応せざるを得ない状況であったため、その影響はアンケートの自由回答欄でも確認できる。このように 2023 年度の卒業研究生は在学時に遠隔・対面授業が混在した環境で過ごしていたためか、

- ・大学からの連絡が遅い(これはおそらく事務的なものと教員からのものが混在している)
- ・部活・サークル等の課外活動に参加できなかった(またはそれらの内容を知ることができなかった)

といった回答が多く見受けられた。一方で、2022 年以降の自宅待機が解かれた後では

- ・研究室での先輩や教員とのコミュニケーションが良かった

といった感想や、良かった点の回答で

- ・友人増えて学生生活楽しい 10
- ・卒業研究 9

などのように対面での学修指導が好意的に受け入れられている様子が確認できる。ネガティブな意見では

- ・A 号館の研究室の作りは良くない、騒音も換気もひどい
- ・研究室の個室化を希望
- ・研究室がオープンスペースなので個人情報漏洩リスクが高い

などといったスタディラボが研究に向いてないというものが散見した。

教育に関する総評では、2020 年度カリキュラムで開始したメカトロニクス基礎演習、実践演習、創成演習のアクティブラーニング科目の評価が高かったため、新カリとして成功したと考えている。また、卒業研究が対面で実施されたことや、研究室での同級生・先輩院生との間のコミュニケーションが好意的に受け取られていることが分かる。さらに専門教育の充実も学生に好意的に受け取られていることがアンケートより分かる。

以上、アンケートの結果より、現在の電子機械工学科のカリキュラムでの教育成果が十分に発揮できたと考えられる。

2023 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2024 年 6 月 6 日

工学部 機械工学科

2023 年度主任

吉岡 真弥

[A] 学生が獲得した知識・能力に関する項目について

学生が獲得した知識・能力に関する項目は最も低い「的確な判断力」でも 3.7 であり、それ以外の「幅広い分野にわたる教養」「専門的な知識・技能」「物事を論理的に考える力」「知識やツールを組み合わせて課題に取り組む力」「考えていることを図解などで表現できる力」および「困難に直面してもそれに対処していく力」はすべて 3.9 もしくは 4.0 と高い数値であった。すべての項目において 2022 年度の本学科の平均値を上回っており、「専門的な知識・技能」をある程度獲得したと感じた学生は昨年度よりも明らかに増加したと考えられる。またこれら項目は工学部平均値を下回るものは一つもなく、講義・実習・卒業研究を通じて学生の社会人基礎力の獲得を目指す学科教員の取り組みが成果として現れたものと考えられる。他者との協調や課題発掘能力に関する設問についても平均値が「リーダーシップ」の 3.4 以外は 3.7 以上と高い。これら数値も昨年度の学科平均ならびに今年度の工学部平均を上回るものが多かった。高学年次において COVID-19 関係の各種制限の緩和が進んだことにより、卒業研究等における他者との関わりの中で実現される教育がさらにしっかり実現されたものと考えられる。他者との協調や課題発掘能力については、その満足度が 2 年続けて大きく伸長しているが、きわめて重要な能力であるため、プロジェクト型教育や卒業研究等を通じてその養成に引き続き注力していくことが重要であろう。

「国際的な視野」に関しては「獲得していない」、「あまり獲得していない」の回答をした人の数が他の項目に比べて明らかに多い。この傾向は、機械工学科だけでなく、工学部全体でも同様になっている。これは、工学部には留学生が少なく外国人との交流がほとんどないことが学生の評価に現れていると考えられる。学科単独で解決できる問題ではないが、国際的視野および外国語によるコミュニケーション能力は多くの企業でも求められていることもあり、専門科目や卒業研究を通じ、学科としても外国語に触れる機会を引き続き増やす方法を検討したい。

[B] 授業科目群、教育設備・機器に関する項目について

専門教育の授業についての評価を見ると、「基礎専門科目・専門科目（講義）」3.9、「基礎専門科目・専門科目（実験・実習・演習など）」4.2 および「卒業研究やゼミにおける指導」4.4 といずれも高い平均値であり、すべて昨年度からさらに上昇している。これら項目の点数はすべて工学部平均値よりも高い。昨年度からの COVID-19 による規制の緩和を受けて、専門教育について各教員が実施している丁寧な指導が効果を発揮した結果であると考えられる。自由記述欄の記載に、実験・実習科目を増やしてほしいという意見が一部みられるものの、実験・実習科目は学生の期待に応える内容を実施・提供できていると考えられる。例年の傾向であるが、自由記述からは、機械工学科の多くの学生が、実験・実習や卒業研究で手を動かすことに興味を持っていることが確認できる。実験・実習系授業については効果的な授業方法の検討をこれまでと変わらず続けることが重要と考えられる。

設備関連では、「図書館関係」、「パソコン等の IT 機器の充実度・利用しやすさ」そして「講義室関係」とも全体として昨年度からさらにわずかではあるが上昇している。大学全体での細かな対応の効果が表れたのではないかと考えられるが、平均値は 4 点には届いておらず必ずしも高いわけではないので、引き続きの対応が必要であろう。自由記述欄を見ると、「E. 本学で改善すべきと思う点」では 77 件の意見のうち 14 件が、「G. 大阪電気通信大学への要望や提案」では 42 件中 5 件が、「研究室間の仕切りがない」構造に対する不満あるいは研究スペースが狭いこと、研究スペースが狭いのにプロジェクトルームなどが使いなことを指摘している。これら研究室態様への不満は新 A 号館を使い始めた 2020 年度の調査から学科を問わず経常的に現れており、学生ラウンジ部なども含めて、学生が集中して卒業研究に取り組める学生研究スペースの環境を大学として早急に整備することが強く望まれる。

事務サービスについては、前年度とほぼ同じ点数であるが、いくつかの項目は点数が下がっている。職員の皆様には丁寧なご対応をいただいていると考えているが、この結果を受けて、これまで以上に職員の皆様と密に情報を交換して、学生の満足度を高める方策を学科としても検討してゆきたい。

総合評価について

総合評価は7.3ポイントであり，2021年度および2022年度の6.9ポイントから大幅に向上したが，一昨年度，昨年度に続いて工学部平均よりわずかではあるが低いポイントにとどまっている．学科としての取り組みは効果を現してきていると考えるが，学科全体で評価結果と自由記述の内容を検討し，更なる満足度の向上を目指して教育への取り組みの改善に引き続き努めていきたい．

2023 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2024 年 6 月 13 日

工学部 基礎理工学科

2023 年度主任 影島 賢巳

総合評価の数値は 6.9 であり、前年度の 6.8 から大きな変化はない。しかしこの値は工学部全体の平均の 7.4 を有意に下回り、工学部中で最低であるので、満足度を上げる工夫は必要であると考え。

[A]の設問中の個別の項目中で、工学部平均より 0.3 ポイント以上低くなった項目は以下であった。

- 2 知識・技能
- 8c 国際的な視野(国際交流)
- 9 コミュニケーション能力
- 11 他人と協調して物事に取り組む力
- 12 新しい課題を発掘する創造力

これらのうち、まず「2 知識・技能」については、学科の性格上、特定職種 of 技能を教えるような教育内容が他学科にくらべて少ないことが一因ではいかと考えている。ただし、技能面はともかく知識については専門性の高い教育を実施しているはずであるので、その割にこの項目のポイントが低いのは、教科内容が学生に真の知識として定着していない面があることを示唆しているようにも考えられる。学生のレベルとニーズに見合った教育内容になっているかどうか、改めて確認する必要があるだろう。

「8c 国際的な視野(国際交流)」については、研究室での活動によって国際性の有無の差が大きいことが考えられる。比較的小規模のグループで学術的研究を行うスタイルの研究室が多いため、必然的に大規模な研究を通じた国際交流なども起きにくくなることは考えられる。しかし、国際誌の学術論文などを参照しながら研究することは多くの研究室で行っているはずであることを考えると、研究のレベルを上げることが国際性を広げることにつながる可能性はある。

「9 コミュニケーション能力」「11 他人と協調して物事に取り組む力」の 2 点は、研究以外のプロジェクト活動などの機会が他学科に比べて少ないことが原因の1つかもしれない。学生相互のコミュニケーションを誘発するようなプロジェクト性のある活動をけん引することを検討すべきではないだろうか。こうした活動を強化すれば「12 新しい課題を発掘する創造力」の項目も改善に向かう可能性がある。

[B]の設問中の個別の項目中で、N 学科に特徴的なものとしては、「6 卒業研究やゼミにおける指導」と「7 教職科目」のポイントが工学部平均を有意に上回っていることが挙げられる。とくに前者については、自由記述でも多くの学生からの声で支持されているので、N 学科のポジティブな点であると考えられる。今後このような手厚い指導体制をさらに強化していくことが必要であろう。後者については、教職にこれだけ力を入れている学科は他にないので、ある意味当然のリアクションであると考えられるが、教職課程は学科(専攻)の売りの1つでもあるので、新N学科の体制でも今までと同様に教職支援に努めていくべきであろう。

自由記述の項目を見ると、D の「本学で良かったと思う点」で、新しい A 号館の綺麗さや自習スペースとしての使いやすさを称賛する声があるいっぽうで、E の「改善すべきと思う点」で、オープンラボ形式であることによる他者との干渉の問題を指摘する声もある。共通スペースの運用の仕方については今後も検討が必要であろう。

2023 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2024 年 6 月 6 日
工学部 環境科学科
2023 年度主任 榎本 博行

1. はじめに

2023 年度の卒業生は、入学初年度からコロナ禍の影響を大きく受け、授業開始が 5 月となり、すべての授業で遠隔授業を強いられた。そのため、自分が思っていたような学生生活を送れなかったと想像される。それらをふまえ、環境科学科の 2023 年度卒業生満足度調査結果について学科会議などで検討した。ここでは、その結果の概要と今後の満足度向上のための対策について報告する。

2. 環境科学科の調査結果の概要

大学全体および工学部全体、環境科学科 2023、2022、2021、2020 年度のそれぞれの結果を表1にまとめた。総合評価などは 2022 年度と同じで、大学全体や工学部の平均レベルより 0.2~0.3 ポイント高かった。

表 1. 獲得数値の合計のまとめ

	全体 (2023)	工学部 (2023)	U (2023)	U (2022)	U (2021)	U (2020)
[A] 知識・能力の獲得	3.5	3.5	3.6	3.6	3.5	3.6
[B] 授業科目群や教育設備・ 機器など	3.7	3.6	3.8	3.8	3.7	3.9
[C] 総合評価	7.4	7.3	7.6	7.6	7.3	7.5

[A] 知識・能力の獲得

知識・能力の獲得については、ここ数年、大きく変化していない。

大学全体や工学部と比較して低いポイントとなっている項目として、困難に直面してもそれに対応していく力(7)が挙げられ、コロナ禍にあって思っていたような学生生活を送れなかったことが影響しているものと考えられる。また、国際的な視野(8)が 2.7~3.0 ポイントと、他の項目と比較すると相対的に低い。これは、コロナ禍にあって国際的な活動も制限されたため、改善が難しかったものと考えられる。今後も継続的に改善すべき点として注視していきたい。

[B] 授業科目群や教育設備・機器など

授業科目群や教育設備・機器などについては、大幅に向上した 2020 年度の値から 0.1 ポイント低下しているが、昨年と同じポイントを示した。これまでと同様、授業科目群で高いポイントを示している項目は、卒業研究やゼミにおける指導(6)で、大学全体や工学部の平均レベルより 0.1 ポイント高かった。

一方で、事務サービスのポイントが上昇あるいは維持しており、コロナ禍での事務方のきめ細かい対応があったからだと思われ、深く感謝している。

合計は 3.8 ポイントで、前年度と同じである。大学全体 3.7、工学部 3.6 から考えると、環境科学科の学生の満足度はすこし高かったものと考えられる。

[C] 総合評価

総合評価は 7.6 であり、前年度と同じである。大学全体 7.4、工学部 7.3 から考えると、環境科学科の学生の満足度は高かったものと考えられる。自由記述欄から、卒業研究・研究室での教育に関する満足度が高く、好意的なコメントが目立っていることから、各教員の丁寧な指導が高いポイントの要因となっていると考えている。

3. さらなる満足度維持・向上のための対策

3.1. 新しい専攻でのカリキュラムへの準備

2019 年度より食環境と住環境とを学科の新しい柱に位置付けて学科内の改革を実施してきた。食環境に関しては、2019 年 5 月に食品衛生管理者および食品衛生監視員の養成施設として認定された。また、住環境については、施工管理技士の指定学科として 2022 年 8 月に認定された。これらの学生の将来が見える・将来に役立つ・卒業時に資格が得られるカリキュラムにより、卒業時の満足度を上昇させてきた。

また、小中学校や高等学校にて SDGs に関する取り組みが始まっている。SDGs には食環境・住環境に関する内容が盛り込まれており、本学科の新たな柱の定着には大きな追い風となっている。新入生への教育はもちろん、在校生についても SDGs に関する知識の定着をはかり、今後の持続可能な社会に貢献しうる人材を育てることにより社会で必要な知識を大学にて学んだ実感を与え、満足度向上につながると考えている。

2024 年度の学科再編によって、食環境は工学部 基礎理工学科 環境化学専攻へ、住環境は建築・デザイン学部 建築学科 空間デザイン専攻へ引き継がれることとなり、2023 年度はその準備を行った。

3.2. プロジェクト等の活性化

環境科学科では、「ベリーベリープロジェクト」、「カフェラボプロジェクト」、「電池プロジェクト」などのプロジェクト型教育を推進する一方で、「地域プロジェクト活動 1・2」等の総合科目(キャリア形成群)を通じて、大学祭等と同様なイベントに関わることができるように積極的に勧めている。引き続き、このような活動を活性化させるように努力することで、全体の満足度も向上させることができると考えている。

2023 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2024 年 6 月 7 日

工学部 建築学科

2023 年度主任 高畑 顯信

1. 知識・能力の獲得に関するアンケート結果に対する検討

「幅広い分野にわたる教養や専門的な知識・技能など建築の基盤に関わる知識・能力の獲得」は平均評価点数は質問7項目中2項目が4.0以上であり、7項目全体でも3.8～4.1の高評価となっている。しかし2022年度と比較すると3項目で0.1ポイント下がっており、各項目ごとに4～7人程度の1～2の低評価者もいることから、不満足であった学生もいることがうかがえる。この不満足者が総合評価4以下の低評価者7名と推察される。

「国際的な視野」の項目では平均評価が2.8～3.2と低いものの、2022年度卒業生の2.5～3.0から上昇している。個人別評価でも21～32人程度が1～2の低評価を与えている。今後の社会環境を考えても国際的な視点の教育が不足していたと評価されていることは、まだまだ注力が必要である。

「コミュニケーション能力やグループワークに取り組む力」は平均評価はおおかた3.4～3.9で2022年度と同程度の評価となっている。教育の目的が達成できてはいるものの、質問1～6に比較して必ずしも高評価とは言えない。学生の期待には応えられていない可能性がある。特に、「リーダーシップ」については3.4と低く、個人別評価では13人が1～2の低評価をしている。建築専門能力として必要なものなので、今後底上げをしていきたい。

2. 授業科目、教育設備・機器に関するアンケート結果に対する検討

「総合科目」は評価平均が3.5～3.9程度とあまり高くなく、2022年度から向上しているもののまだ学生の期待値には到達していないものと考えられる。共通教育機構と連携して今後取り組むべきだと考える。他方、「専門科目」は4.0～4.4と高評価である。特に「卒業研究やゼミにおける指導」は2021年度から継続的に平均値4.3であったものが2023年度は4.4となった。質問項目の中で最も評価は高く、個人別評価でも80人の回答中評価5が46人と最も多く57%、次いで評価4が22人27%である。少人数・個人別のきめ細かい指導が高評価を得たと考えられる。ただし、2以下の低評価者が2名いることも見過ごしてはならない。原因を掘り起こし、改善に努めたい。

「図書館・IT機器講義室の環境などの施設や、シラバス・学務課などのサービス」は平均評価3.5～4.0と概ね高評価である。しかしここでも個人別評価では1～2の低評価者が2～5人いる。意見をくみ上げてフィードバックをしたい。

「サービス」の中でも就職課は平均評価4.2と高評価である。学科と就職課の連携の成果が出て、進路決定率が100%となったことを学生も評価しているものと考えられる。しかしここでも個人別評価2の低評価者が2名いる。一部の学生には不評であったことがうかがえ、原因追求と改善が必要である。

大学祭等の行事が平均評価3.1と低評価であったのは、コロナ禍による活動制限がいまだに影響を残しているものと考えられる。早く日常を取り戻せることを切望する。

3. 総合評価に対する検討

総合評価は10段階で7、8が最も多く、評価7～10までに80人中68人85%が評価し、総合評価は7.7となった。これは2021年度7.4、2022年度7.5を向上更新している。概ね学科の活動の方向性は評価されているものと考えられる。一方で回答者80人中で低評価2～4とした学生が7人いる。上述したが質問1～7の専門教育に対する低評価者がこれに該当しているものと考えられる。これらの不満の原因を解決することが課題として残された。一方で卒業生84人中96%の81人が回答をしていることは、関心の高さがうかがえ、特筆すべきことである。

4. 自由記述に対する検討

自由記述は設問にもよるが最大で81人の回答者中86項目を記述している。複数回答をしている学生もあり、関心の高さがうかがえる。教員実名表記や具体的な記述も多く、学校や教員・事務組織に対して概ね好意的で感謝の意を表している。これらの記述を参考に今後の学科運営に生かしていきたい。

5. 満足度調査全体に対する検討

今回2023年度調査は、建築学科にとって3回目の卒業生の満足度調査である。卒業生84人のほぼ全員の回答を得られていることは、本学科に対してしっかりと意識をもって学修し、社会に出ていったことがうかがえる。この結果をもととして、今後改善を重ね卒業生の満足度を向上させていきたいと考えている。

2023 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2024 年 6 月 13 日
情報通信工学部 情報工学科
2023 年度主任 江原 康生

1. 総合評価の結果について

2023 年度卒業生満足度の総合的評価（項目[C]）は 10 段階の主観評価において平均評価値が 7.7 となる結果であり、昨年度(7.1)よりも高い評価が得られた。在学中の大半がコロナ禍であった中、学業や様々な活動に制限がかかっていた状況にもかかわらず、本学および本学科が教育および学生サービスの向上を高いレベルで維持することができていることを示している。その傾向を踏まえて、現行の学科教育の課題と改善方針を卒業生満足度調査の結果に基づいて検討した。

2. 知識・能力などの獲得について

質問項目[A]群の「本学での大学生活をとおして、あなたは次のような知識や能力などをどの程度獲得したと思いますか」に関する回答は平均 3.7 となり、全体を通して各項目で昨年度よりも高くなっている。特に、「専門的な知識・技能」「物事を論理的に考える力」「知識やツールを組み合わせる課題に取り組む力」については高い獲得度の評価が得られている。さらに、「考えていることを図解などで表現できる力」「困難に直面してもそれに対処していく力」「リーダーシップ」についても平均 4.0 の獲得度が得られ、評価の向上がみられた。また、「国際的な視野（専門分野）」「国際的な視野（異文化理解）」「国際的な視野（国際交流）」についても、昨年度よりも獲得度が上がっており、コロナ禍の収束に伴い、徐々に活動の幅が広がってきたことが要因と考えられる。今後も可能な限り国際交流に関する機会を充実させていくことが重要と考える。以上の評価結果から、本学科での卒業生の学びに関する評価が上がっている傾向にあり、高い水準を維持できていることがいえる。

自由記述の回答でも、本学科の教育に関して肯定的な評価が多く認められる。2023 年度の特徴として、コロナ禍に伴う様々な制限が解除されたことで、卒業研究における研究室活動で、様々なメンバー間の交流が活発に行われている記述が目立っている。さらに卒業研究における教員の指導に対する高評価が多くみられた。卒業研究では、指導教員が卒業研究生の研究進捗状況を定期的に報告させつつ、適切な助言を与えて議論・検討の機会を設けるほか、学科全体の卒業研究発表会の予稿や口頭発表の準備、卒業論文の執筆に関しても、発表練習・添削指導を何回も綿密に指導を行ってきている。このような指導体制が有効に機能している結果が肯定的な回答につながっていると考える。また、コロナ禍に伴うオンライン授業に対する対応についても肯定的な評価が多く、TA、SA の指導に対する高評価も目立っており、コロナ禍における教育活動も質を落とすことなく実施できていたと考える。一方、多岐にわたる科目における教育においても肯定的な回答が目立っており、多様なニーズに本学科のカリキュラムが対応できていたことがいえる。

3. 授業科目群や教育設備・機器などの評価について

質問項目[B]群の「本学での生活を振り返り、以下の授業科目群や教育設備・機器などについて全体的に評価してください」に関する回答は、小計区分 B1～B7、B8～B14、B15～B19 について、それぞれの平均は{3.9、3.8、3.8}となり、2022 年度の{3.7、3.7、3.6}と比較して、全体的に評価が高くなっている。特に「基礎専門科目・専門科目(講義)」「基礎専門科目・専門科目(実験・実習・演習など)」「卒業研究やゼミにおける指導」については高い評価を維持しており、学科における教育活動に対する肯定的な評価が得られていると考える。また「留学制度」「大学祭等の行事」に関しては評価が他の項目と比べて低くなっているが、昨年度よりは高くなっている。これらはコロナ禍の収束に伴い、今後はさらなる評価の改善に向かうことが期待される。

4. 自由記述欄への回答について

「本学で良かった点」については、専門的な知識を学ぶことができたことや、研究室活動において、多くの友人や仲間ができたことを挙げた学生が非常に多く、学生同士の良好な社会的つながりを構築することが大学の満足度に寄与することがわかる。また、研究室の指導教員との関係についても、肯定的な回答が多く、コロナ禍においても大学生活の中で多様な人間関係を育むことができていることを示

している。さらに、コロナ禍における授業対応や就職活動のサポートに対する高評価の回答も多く見られた。

「改善すべき点」については昨年度同様、新 A 号館の研究室環境であり、毎年の調査で非常に多くの指摘を受けており、新棟における研究環境の改善が、学生満足度の向上における重要な課題であることを示している。特に指摘が多かったのは、研究室に壁がないため、廊下からの騒音の問題、および他人の視線が気になる点が挙げられていた。さらに研究室間でも騒音に対する苦情も多く聞かれており、研究室に来ることにストレスを感じている学生も多く見られた。情報工学科は他学科と異なり、通行量の多い廊下に、壁のない状態で直接面している研究室が多いため、騒音や視線の問題の指摘につながっているとされる。今後、学生の卒業研究活動の環境改善のため、大学と連携して、早急に取り組む必要があると考える。

また、大学からの各種情報の周知に関する対応が不十分である指摘も多く見られた。現在、キャンパス内に掲示板が存在しないため、Web やメールでのみ情報周知が行われているが、その対応がほとんど機能していないことがいえる。こちらも学生が重要な情報を見落とさないためにも対応の改善が必要と考える。

2023 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2024 年 6 月 20 日
情報通信工学部 通信工学科
2023 年度主任 木原 満

通信工学科は、これからますます社会に大きな影響を与える AI、IoT、ビッグデータなどを基盤として支える 5G などの通信ネットワーク技術者の育成を目指している。そのため本学科では、その基礎となる「ブロードバンド」「インターネット」「マルチメディア」の 3 分野について、ハードウェアとソフトウェアの両面から幅広い教育を行い、ICT と IoT の世界で次世代を担う技術者を育成し続けている。

卒業生満足度調査においては、[A] 知識や能力の獲得(5 段階評価)、[B] 授業科目や教育設備・機器など(5 段階評価)、[C] 総合評価(10 段階評価)の 3 項目について調査結果が公表されている。2023 年度の調査では、通信工学科の卒業生 76 名からの回答が得られた。2023 年度を含む過去 6 年間の調査結果の平均値の推移を、大学全体と比較して表 1 にまとめた。全体的な傾向として、本学科は 6 年間で少しずつポイントが高くなっていった。しかし、最も良くなった 2023 年度の結果でも、大学全体と比較すると、[A] 知識や能力の獲得と[C] 総合評価で 0.1 ポイント低くなっている。これについては、学科教員一同が学生からの評価を真摯に受け止め、満足度がさらに高くなるような教育を目指してさらなる努力をしていく必要がある。

表 1. 卒業生満足度調査のまとめ

	F (2023)	大学全体 (2023)	F (2022)	F (2021)	F (2020)	F (2019)	F (2018)
[A] 知識・能力の獲得	3.5	3.6	3.3	3.5	3.5	3.4	3.3
[B] 授業科目群や教育設備・ 機器など	3.7	3.7	3.7	3.7	3.6	3.5	3.6
[C] 総合評価	7.4	7.5	7.1	7.3	7.3	6.9	6.8

個別の自由記述欄にて、評価の高かった点と改善を要望された点を以下にそれぞれまとめる。

・評価の高かった点

自由記述で多い順に以下に抽出した。最も多かったのは、教員の専門分野の広さや教育および研究室での研究活動と交流であった。次に、資格取得や就職活動に満足している記述が多かった。今後も、更に満足度を高めるべく教育や研究室活動、資格と就活の支援を推進していきたい。

1. 教員の専門分野の広さや教育
2. 研究室での活動(研究室での交流や教員による指導を含む)
3. 資格取得や就職活動とそのサポート
4. 大学内での友人との交流
5. 大学設備の充実度
6. オンライン授業や実験・実習などの授業への評価

・改善を要望された点

多かった要望は、①授業方法の改善、②大学設備の充実と③連絡方法の改善であった。①授業方法の改善では、実験レポートの手書き、遠隔授業と面接授業の混在などの指摘があった。②大学設備については、A 号館の空調が悪い点や研究室の狭さなどの指摘があった。③連絡方法については、マイポータル、メール、Slack の 3 種類の方法をメールに統一して欲しいとの要望があった。その他は、学務課職員の対応の改善なども挙げられていた。これらの全ての情報を学科の教員間で共有した。

以上

2023 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2024 年 6 月 12 日
医療健康科学部 医療科学科
2023 年度主任 日坂 真樹

1. 教育目標やカリキュラムの位置付け, シラバスについて

教育目標は, カリキュラム・ポリシーの通り, 高度化・多様化する医療技術に対応できる人間力と基礎的知識・技術力について教授研究し, 医療・福祉機器の開発や医療現場において活躍できる総合医療エンジニアと高度技術に対応できる臨床工学技士を育成するために工学と医学の基礎を十分に学習させることにある. 具体的には, 医用工学系について ME 1 種および ME 2 種実力検定試験, 医療機器情報コミュニケーター MDIC, 臨床工学技士国家試験に合格させることにある.

2. 教育改善や授業点検, 成績評価(平均値, 成績分布, 合格率など)について

- 1) 専門科目の授業改善プランを提示し, 学習環境改善を図った.
- 2) 1,2 年次に対してコロナ禍のため, 新たに Web 試験を導入し, 2023 年度は 7 月, 10 月, 2 月および 2024 年 4 月の計 4 回(追試験含む)の統一問題による実力試験を実施した. なお, 2 年次に対する 4 月の実力試験は対面形式で実施した. その中で, 成績優秀者を表彰して学生のモチベーション向上を図った. 基礎工学分野の成績優秀者はのべ 190 名, 医用工学分野はのべ 287 名, 基礎医学分野はのべ 361 名の 60% 以上得点者を出した. これは, e-learning の学習時間も大きく関連しており, その後の学習過程にも大きく影響するものであると考えている.
- 3) 医科医療事務検定三級では, 合格者は 1 年次 8 名, 2 年次 1 名, 4 年次 1 名の計 10 名であった.
- 4) 第 2 種 ME 技術実力検定試験では, 2 年次 3 名, 3 年次 3 名, 4 年次 5 名の計 10 名であった.
- 5) 医療機器情報コミュニケーター MDIC では, 合格者は 3 年次 1 名の計 1 名であった.
- 6) 第 1 種 ME 技術実力検定試験に関しては, 合格者はいなかった.
- 7) 臨床工学技士国家試験に 22 名が合格し, 現役生の合格率として 91% を達成した.

3. 学生指導(履修指導や教育相談, 生活相談, 就職指導など)について

例年, 教務委員および臨床実習担当教員, さらに, 卒業研究指導教員またはグループ担任を中心とした履修指導につとめ, 「履修の取りこぼし」防止をおこない, 学生自身が国家試験受験資格に必要な科目の履修状況を確認できるような資料を用いて, 学生自らが学修状態を把握し, それを管理できるように務めている. 新入生に対してグループ担任と対面にて面談する機会を作り, 可能な限りケアできる環境を整えた. また, 学務課から定期的に送られてくる講義の出席率も活用し, 離学対策として学科会議でも情報共有した. 現在, 来学できていない学生を把握できており, 早期の情報収集に努める. また, 就職指導においても, 3 年生では「就職適性論」において就職活動における基本的事項を修得させ, 4 年生では就職担当教員や卒業研究の指導教員, 就職課と連携しながら学生の状況を逐次把握し, 適切な就職指導を実行できるような環境を整えている.

4. 卒業研究指導について

本学科では卒業研究の前に「医療科学実習」「プレゼミ」「総合医療工学実習」の科目を設け, 卒業研究や技術系社会人として必要な基本的スキルを身につけさせている. これによって, 視野を広く持たせ, 学生自身の将来の選択肢を多く持つ工夫をおこなっている. なお, 卒業研究配属に必要な研究室訪問も「医療科学実習」の授業内でおこない, 訪問学生に対して教員または先輩たちが個別に対応するようにしている. 卒業研究は 4 年生前期末の中間報告, 後期中期末の概要提出と口頭試験, 後期末の論文提出のすべてを満たす必要があり, その内容は生体医工学・福祉工学の各関連分野における調査・実験系の研究となっている. 2023 年度は学科会議で個々の学生の状況を確認し, 学科全体で卒業研究の質の維持に努めた結果, 本学科所属教員の研究室における卒業研究において, 卒業を希望する学生の不合格者はなかった.

5. 卒業生満足度調査結果について

1) 総合評価に関する分析

教務委員および実習担当教員、さらに、卒業研究指導教員またはグループ担任を中心とした履修指導をおこなった結果、個々の学生状況を把握しやすい環境を整えた。また、コロナ禍の影響を受けた学年ではあったものの、充実した講義や実験・実習、卒業研究を実現したため、2023年度の教育の総合評価(10段階)は7.1であった。

2) 専門分野と獲得した能力に関する分析

例年通り、臨床工学技士の国家資格取得に向けた授業を適切におこない、学科教員で尽力したこともあり、専門的な知識・技能の獲得度(5段階)は昨年度の3.7となった。国際的な視野(専門分野)に関しては医療従事者である臨床工学技士の国家資格取得の軸があるため、2023年度の平均は2.5となった。なお、国際的な視野の養成は現状の教育方針に沿った環境構築を引き続き学科内で検討していく予定である。

3) 授業科目および卒業研究に関する分析

卒業研究指導教員またはグループ担任からの学生状況を学科会議等で共通認識することにより、個々の担当者だけでなく、学科教員全体でサポートできる体制を構築している。専門教育の実習および講義の満足度評価(5段階)はともに3.8となり、高い講義および実習の評価の向上を得ている。卒業研究やゼミにおける指導の満足度評価(5段階)も4.2と高い評価となった。卒業研究を通じて得る問題解決能力は非常に重要であるため、引き続き、学科内で卒業研究に対する取り組みをさらに充実させていく予定である。また、総合科目群の満足度評価(5段階)も例年程度であり、引き続き、満足度がより一層高くなるよう取り組む必要がある。

4) 自由記述に関する分析

自由記述における内容の印象に残っている科目では学科先生の科目が多く記載されており、充実した教育であったことが窺えた。また、講義や実習の質が高かった、教員と学生との距離が近くいつでも相談できた、工学系など幅広い分野を学べたなど、個々の専任教員の授業に対する良いコメントや高い評価が多くあった。また、卒業研究で教員より手厚いサポートを受けた、研究室の雰囲気がよく自分を高めるきっかけとなった、社会人としてのマナーや言葉遣いを教授してもらったなど、卒業研究を通して、各教員が研究室の学生と信頼関係を構築していることも推察できた。また、専門分野の教授陣に直接指導をしていただけた、幅広い学問を学ぶことができたなどの記述もあり、本学科の目標と一致する記述も多くあった。

5) 教育設備に関する分析

四條畷キャンパス全体の問題と考えられるが、いわゆる食堂や通学のバス、無線ネットワーク環境、事務からの案内などに対する意見が多く、学生の不満を解消させるハードウェアやシステムの改善が必要であると考えられる。

6. その他、特記事項(学科独自の教育、アクティブラーニング、離学者対策など)など

技術者としての必修であるドキュメンテーション能力の基礎を教授するために、2年次前期で「医療科学基礎実習」を開講しており、基礎的に実験を通じて、レポート作成における図表の記述、考察などの基本的な知識を低学年時から徹底させる試みをおこない、2年次の「電気電子工学実験」により、学生自身で経験した実験のレポート作成をおこない、さらに、3年次の「医療科学実習」「総合医療工学実習」の開講により、幅広い分野の知識を得て、4年次の「卒業研究」の中で、プレゼンテーションや卒業論文の作成を可能にするスキルが身につくように、学年の進行に伴い、学生自身でスキルアップができるようにしている。また、3年次の「生体機能代行医用機器学実習」や4年次の「生体機能代行装置学実習」では、学生自身が興味のある部分を中心に事前に調査(グループワーク)し、その結果をプレゼンすることにより、積極性を獲得させるとともに、その結果から学生の知識レベルを外部講師が確認し、実習に役立てている。このような教える側と教わる側の双方にメリットのあるアクティブラーニングを取り入れている。これより、学生自ら興味のある部分に積極的に関わることにより、授業への意欲が飛躍的に向上すると思われる。また、3年次の「ヒト型ロボット創造製作実習」では、板材から部品を金属加工により製作し、学生たちが自ら発案した二足歩行ロボットを製作するなど、実習・演習科目群は学生の自主性を重んじるように心がけている。さら

に、学生中心の心電図読図の勉強会を開催し、高学年の学生が低学年の学生に教える指導もおこなっている。これについては、病院において即戦力として機能する能力であると期待される。同時に、先輩・後輩の人間関係を学び、人間形成にも役立っている。また、企業・病院に就職した卒業生が実習補助員として授業に参加し、学生(後輩)に授業内容はもちろん、社会人としての心構えや実体験などを伝え、学生から大変好評を得ている。

7. 添付資料

特になし。

2023 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2024 年 6 月 19 日
医療健康科学部理学療法学科
2023 年度主任 小柳磨毅

1. 知識や能力の獲得

平均は、3.9 点であり、昨年度比で 0.3 ポイント改善した。昨年は 3 点未満で最も評価が低かった国際的な視野に関する評価も、3.0 以上に改善した。今後、講義や卒業研究において国際的な情報収集を行い、教員の国際誌に論文投稿を推奨するなど、国際交流に努めていきたい。

学科全体で取り組んでいるコミュニケーション能力は、昨年比で、0.1 ポイント増加した。リーダーシップや協調性は 0.3 ポイントの増加があり、カリキュラムの充実が反映したと考えられる。

2. 授業科目、教育設備・機器

専門科目、卒業研究などの満足度はいずれも 4 点を上回り、概ね、講義や実習、ゼミ活動が適切に実施されていたと思われる。一方、総合科目も昨年比でポイントが改善した。図書館と PC の使いやすさの評価が昨年比で減少しており、サービスの改善を要する。

3. 自由記載

専門基礎および専門科目が、国家試験と臨床実習に役立ったとする記述が多く見られた。知識と技術の教育水準をさらに高めていきたい。

一方、学生の不満としては、バス便をはじめとする通学の不便に関する記述が見られた。キャンパス全体の問題として、駐車場を含む、通学の利便性向上に努める必要がある。

以上

2023 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2024 年 6 月 13 日
医療健康科学部 健康スポーツ科学科
2023 年度主任 太田 暁美

1. 大学生活における知識や能力の獲得(質問項目[A])

「国際的視野」を除き、すべての項目で 3.7~4.0 と、昨年度と同様の高い評価を得ることができた。特に評価の高かった項目として「1 幅広い分野にわたる教養」は近年学科全体で学修の取り組みの改善を継続して進めている成果がみられていると考えている。また、「7 困難に直面してもそれに対処していく力」については、2023 年度卒業生は、入学早々遠隔授業と制限の多い大学生活を送ったが、苦労しながらも乗り越えてきた経験も加わったもの影響したと考えられる。「9 コミュニケーション能力」についても例年通り高く、健康、運動・スポーツに不可欠な要素を獲得することができたと思われる。

一方、「8 国際的な視野」すべての項目で昨年より 0.3~0.4 ポイント下回った。学科としても十分に力を入れてきた分野とは言えず、専門分野については、他国との比較、世界の取り組み等を紹介しているが、さらに身近に感じられるように示していく必要がある。語学や異文化について学ぶ機会の多い低学年次にコロナ下の制限を受けたことも影響したと考えられる。

2. 授業科目群や教育設備・機器について(質問項目[B])

1~7 の授業科目については、2. 総合科目(英語科目)のみ昨年度変わらず、その他の科目群は昨年度上昇した。特に、「5 基礎専門科目・専門科目(実験・実習・演習など)」は 0.3 ポイント上昇している。本学科の学生は比較的オンデマンドよりも面接形式を好む傾向にあるが、コロナ下の制限がほぼなくなった状態で実技実習、演習等が行われるようになったことが影響したと考えられる。「6 卒業研究やゼミにおける指導」の評価は昨年からさらに上昇し 4.3 となった。本学科では 3 年前期から就職活動も含め継続的かつ総合的に指導しているが、これらの取り組みが学生にとって適切であったと感じ取れる評価であり、今後も継続して取り組みたい。

8~14 の教育設備等に関する問に対する回答に昨年度からの大きな変化はなく、図書館の書誌の充実度、利用しやすさはやや低い傾向にあった。近年の本学科の学生は、レポート作成や卒業研究においても、インターネットからの情報取得が多く、図書館の利用が少ないために 3 の評価をつける学生が多い可能性がある。

15~19 の項目については、学務課および就職課の事務サービスについてはともに高得点となり、各課職員の満足している様子が伺えた。「19 大学祭等の行事」の評価は 3.3 と低く、後述の自由記述の回答からも不足に感じていたことが示された。

3. 総合評価(質問項目[C])

本学で経験した教育人についての総合評価は昨年度と同様の高評価を得ることができており、これらを維持できるように努めたい。

4. 自由記述

自由記述については、[D]の「本学で良かったと思う点」では主にゼミ活動を通じた教員と良好な関係性や活動に関する記述が多く、学科での取り組みが実を結んだと感じている。[E]の「改善すべきと思う点」および[G]の大阪電気通信大学への要望や提案などでは、通学の利便性や、坂の多い立地など改善が困難なものや、寝屋川キャンパスとの比較、前述の問[B]では評価されない施設についての改善要望が見られた。また、全体的に部活動に満足して充実した学生生活を送ったという学生も多い一方で、部活動やサークル活動の活性化を求める意見が複数見られた。さらに、他学年も含め学生間の幅広い交流を求める意見も散見されており、授業や課外活動を通じて働きかけたいと考えている。

以上

2023 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2024 年 6 月 21 日

総合情報学部 デジタルゲーム学科

2023 年度主任 金村 仁

2023 年度卒業生満足度調査における、総合評価（質問項目[C]）は 10 段階評価で平均 7.4 と前年度より 0.2 ポイント下降した。質問項目[A] 群（知識・能力の獲得に関する質問）、質問項目[B] 群（授業科目群や教育設備・機器などに関する質問）の評価はともに前年度と同じであったが、学びの質を維持できたと考えられる。

質問項目[A] 群の「本学での大学生活をとおして、あなたは次のような知識や能力などをどの程度獲得したと思いますか」に関する回答は、3.6 ポイントと前年度と同じであるが小項目では違いがみられる。「専門的な知識・技能」はそれぞれ 4.0 ポイントで昨年同様に維持、また「知識やツールを組み合わせる課題に取り組む力」「他人と協調して物事に取り組む力」は前年度に比べて 0.1 ポイント上昇して 4.2 ポイントといずれも高い評価を維持している。

「的確な判断力」は 0.2 ポイント下落して 0.2 ポイント、「新しい課題を発掘する創造力」は 0.1 ポイント下落して 3.8 ポイントとなった。昨年度はコロナ禍が終わり対面授業が増えたことが評価の上昇の理由であったが今年度は対面授業にも慣れ対面授業に対しての新鮮味がなくなったのではないかと考える。また「国際的な視野」に関しては、小項目の「国際的な視野（専門分野）」は 0.2 ポイントと下落しており今後はデジタルゲーム分野における国際的な視野を育む教育が必要になると考える。「国際的な視野（異文化理解）」「国際的な視野（国際交流）」についても 0.1 ポイント下がる結果となった。従来より異文化理解や国際交流の機会を設けていて、興味を持つ学生も増えているように実感しているが、結果に結びついていないことを考えると学科として対策を検討する必要がある。

質問項目[B] 群の「本学での生活を振り返り、以下の授業科目群や教育設備・機器などについて全体的に評価してください」に関する回答は、3.7 ポイントと前年度と同じであった。授業科目群については 0.1 ポイント下がりして 3.7 ポイントとなった。基礎専門科目（実験・実習・演習）は 0.1 ポイント上昇しているので学科の特色としている科目については評価されていると考える。なかでも「卒業研究やゼミにおける指導」は 4.3 と前年度同様ではあるが評価は高い。

また、事務的なサービス等に関する質問群では「パソコンなどの IT 機器の充実度・利用しやすさ」が前年度より 0.4 ポイント下がり 3.6 となった。これは全評価の中で最もポイントが下がっており、おそらく年度はじめの学内ネットワークへのつながり難さが大きく影響しているものと考えられる。

「講義室の映像・教材提示装置の充実度」は 0.2 ポイント下がっているが、特に設備が変わったことはない、原因は不明である。「図書館の利用のしやすさ」が前々年度より前年度は 0.3 ポイント下がって 3.6 となっていたが今年度はさらに 0.1 ポイント下がっている。コロナ禍以降には図書館の利用の仕方に慣れる機会が少なかったことが要因ではないかと思われるが、同時に研究資料を電子媒体に頼る学生が増えていることもまた要因ではないかと思う。

今評価を得た項目はそれが維持できるように、また、「留学制度」の評価が 0.2 ポイント下がり、評価が低い「国際的な視野」と合わせて国際感覚学ぶ意欲がある環境を醸成させる必要がある。全体的に下落傾向にあるが、特に顕著であるのが「パソコンなどの IT 機器の充実度・利用しやすさ」と国際交流に関するもので、情報技術を学ぶ学科としてその学びの環境を高い水準にする必要がある。

2023 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2024 年 6 月 11 日
総合情報学部 ゲーム&メディア学科
2023 年度主任 由良 泰人

本学科の教育についての総合評価(質問項目[C])は、10 段階評価で 7.5 であり、これは、大学全体より 0.2 ポイント上回っており、昨年度より 0.2 ポイント上回った。今後も維持向上できるように改善していきたいと考える。

1)質問項目[A]「本学での大学生活をとおして、あなたは次のような知識や能力などをどの程度獲得したと思いますか?」の回答(5 段階)では、12 項目の平均が 3.8 であった。昨年度より 0.2 ポイント上回っており、所属する総合情報学部平均でも 0.2 ポイント上回っていた。昨年度よりも改善されたものは、幅広い分野にわたる教養 4.0、専門的な知識・技能 4.2、的確な判断力 3.9、困難に直面してもそれに対処していく力 4.0 と、昨年に向上した点は維持したまま、それ以外の部分を向上させることが出来た。しかしまだ国際的な視野に関するものは昨年よりも向上しているがまだ低く、専門分野 3.1、異文化理解 3.0、国際交流 2.9、であった。これらのことから、国際交流におけるコミュニケーション能力の育成について、教育改善の課題があるものと受け止める。

2)質問項目[B]「本学での生活を振り返り、以下の授業科目群や教育設備・機器などについて、全体的に評価してください。」の回答(5 段階)では、19 項目の平均が昨年度と同じ 3.8 であった。昨年度より高いものは、総合科目(英語科目)3.6、総合科目(英語科目以外の外国語科目)3.4 があつたが、教室や設備に関するものでは低下が目立った(図書館の図書・雑誌等の充実度 3.7、図書館の利用のしやすさ 3.7、パソコン等の IT 機器の充実度・利用しやすさ 3.8、講義室等の環境(空調, 照明等)3.9)。これらのことから、教育環境のさらなる充実が必要と考える。また、卒業研究やゼミにおける指導も 4.2 と昨年より 0.1 ポイント下つたことに対して、3 年生後期からのゼミ指導において、本学科の教育目標の完遂に教員一同の一層の努力に努めたい。

3)自由記述[D]「あなたが本学で良かったと思う点を書いてください。」での 90 件の回答を分類すると、カリキュラム・教育方針・教育システムに関するものが 46 件(51.1%)、教員に関するものが 20 件(22.2%)、施設・設備に関するものが 9 件(10%)、友人に関するものが 15 件(16.6%)であった。カリキュラム・教育方針・教育システムに関するものと教員に関するもので 66 件(73.3%)となり、ほぼ昨年の傾向通りであるが本学科のカリキュラムとそれらを実現させるべく邁進した教員の努力が、学生の学びに役立ったものと受け止めたい。

4)自由記述[E]「あなたが本学で改善すべきと思う点を書いてください。」での 70 件の回答を分類すると、カリキュラム・教育方針に関するものが 25 件(35.7%)、情報連絡に関するものが 19 件(13.3%)、通学バスや立地に関するものが 14 件(20%)、施設・設備に関するものが 12 件(17.1%)などであった。昨年に対してカリキュラム・教育方針に関するものが 10.ポイント減少し、施設・設備に関するものが 9.2 ポイント増加する結果となった。

5)自由記述[G]「あなたの現在の感想も含めて、大阪電気通信大学への要望や提案などを自由に記してください。」での 50 件の回答を分類すると、教育環境に関するものが 9 件(18%)、カリキュラム・教育方針に関するものが 9 件(18%)、立地・設備に関するもの 14 件(28%)、学生生活に関するもの 18 件(36%)などであった。大学としての教育システムのさらなる改善に努めていかなければならないと真摯に受け止める。

以上

2023 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2024 年 6 月 6 日
総合情報学部 情報学科
2023 年度主任 鴻巣 敏之

2023年度卒業生満足度調査の結果についての検討結果を下記のように報告する。

[A]本学での大学生活をとおして、あなたは次のような知識や能力などをどの程度獲得したと思いますか？

全体として各評価の平均値に大きな変化は見られない。新型コロナウイルスの影響を1年次から受けた学年ではあるが、適切な対応が進んだ結果と思われる。コロナ禍においても徐々に全ての授業が遠隔となることなく、対面での授業が有効で可能な授業は対面で行い、遠隔会議システムなどの新たなコミュニケーション手段を利用して、遠隔でも対面と同等の効果が得られる授業は遠隔で行うなど、適切な授業運営ができたことと判断する。このあたりについては、自由記述での良かったと思う点に挙げられた記述からも理解できる。

「8 国際的な視野」の3項目については他の評価項目に比べて平均点が低く、全体の平均値を下げている要因になっていた。数値的には少しの改善が見られるが特別に何かを行ったわけでもなく、学科での取り組みが必要と考える。また、昨年同様「10 リーダーシップ」の評価も高くない。この項目は、「グループディスカッション」の授業を見てもまたその他の機会においても率先してリーダになる学生が少ないことからうかがえる。さらにそのような場面を経験すると逆に自分の不得意さが分かり、そのような自己評価になるのではないかと思う。リーダーシップの達成感につながる工夫を検討しておく必要がある。

[B]本学での生活を振り返り、以下の授業科目群や教育設備・機器などについて、全体的に評価してください。

昨年度とほぼ同様の評価の平均値となっている。項目 4 と項目 5 の基礎専門科目・専門科目に関する部分の評価も高く、新型コロナウイルス感染対策が行き届き、どの授業も効果的に行われたことが評価されていると判断する。

卒業研究やゼミにおける指導については、平均値 4.3に向上した。3年次の卒業研究受講時に教員と対面などで接触する機会が増え、指導が効果的に行われたことが評価されたのではないかと思う。ただ単に対面で行うわけではなく、授業同様に遠隔会議システムを利用するなどのポストコロナ時代のコミュニケーション手段を利用したりなどの指導もされ、場面によって有効な指導ができたのではないかと考えている。

TA による指導も例年通りの高評価となっており、自由記述にも意見がある通り、演習授業におけるTAのきめ細かい対応が良かったものと思われる。TA を引き受けていただいている大学院生の確保は、学部の学生にとって大切なことであることが伺える。

また、「17 四條畷就職課 事務サービス」については、さらにポイントが向上した。これは、2023年度の進路決定率の向上にも表れたし、自由記述にもそれを感謝するコメントが多々見られる。学生の就職活動に関する指導を四條畷就職課が精力的に行った結果であり、学科としても感謝したい。

[C]あなたが本学で経験した教育について、全体として考えて、総合評価を 1～10 の 10 段階で評価してください。

総合評価については、[A]や[B]の評価平均値を 10 点換算した点数とそれほど差はないので妥当と思われる。昨年度より向上したが 0.2ポイントであり、特に大きな変化があったとは考えていない。引き続き、このような評価を受けるようにしたい。

[自由記述]

3 年次の卒業研究実施については、そこで早期に専門的な知識を得る経験や論文作成や発表などの一連の研究活動を経験すること、その上それを生かして時間的な余裕をもって就職活動を行えることなどから良好な記述が見られる。就職活動に3年次卒業研究が有効であると判断する。

プログラミングや専門分野の教育内容についての評価も肯定的であり、その他さまざまな授業に肯定的な印象の記述があった。新型コロナウイルスの影響を 1 年次から大きく受けた学年ではあるが、学生・教員

ともに乗り越えた一体感があった学年だったと思う。

キャンパスの立地や、バスの時間など交通手段については改善を求める意見がみられるが、遠隔講義が多かったことから例年よりは少なくなった気がする。ただし、バス乗車の積み残しは例年発生しており、改善が望まれる。

2023 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2024 年 6 月 10 日
共通教育機構 人間科学教育研究センター
2023 年度主任 金田 啓稔

1. 総合科目の満足度(評価)について

2023年度の卒業生満足度調査結果より、人間科学教育研究センターが主に担当している「総合科目(外国語以外)」の満足度は、寝屋川キャンパス3.7(前年度比±0.1)、四條畷キャンパス3.6(前年度比-0.1)であった。また、「総合科目(英語科目以外の外国語科目)」の満足度も、寝屋川キャンパスで平均3.5(前年度比±0.2)、四條畷キャンパスで平均3.4(前年度比-0.1)であった。四條畷キャンパスにおいてわずかに低下しているが、2021年度と同評価であり、寝屋川キャンパスにおいては上昇している。この卒業生満足度調査とは別に授業期間内に実施している授業アンケートにおいても総合科目の評価は高まってきていることから、引き続き、人間科学教育研究センターとして授業改善に務めていきたい。

『本学での大学生活を通して得られた知識・能力』についての質問項目では、「幅広い分野にわたる教養」において寝屋川キャンパスで平均3.9(前年度比+0.1)、四條畷キャンパスで平均3.9(前年度比±0.0)、「物事を論理的に考える力」において寝屋川キャンパスで平均3.9(前年度比+0.1)、四條畷キャンパスで平均3.9(前年度比±0.0)、「コミュニケーション能力」において寝屋川キャンパスで平均3.7(前年度比+0.1)、四條畷キャンパスで平均3.8(前年度比+0.1)であり、高い評価がなされている。一方、「国際的な視野(異文化理解)」において寝屋川キャンパスで平均2.8(前年度比+0.2)、四條畷キャンパスで平均2.7(前年度比-0.1)であり、顕著に低い評価であった。カリキュラムの見直しを含め充実した総合科目の提供が必要である。

2. 総合科目に関連する自由記述について

次に、卒業生満足度調査の自由記述から、総合科目に関連する記述を抜粋した上で改善策を検討する。総合科目全般に対する意見は見られなかったが、それぞれの科目に関する記述について検討する。

(1)総合科目(講義・演習系科目)について

学生自身が大学で学修を進めていく中で広く視野を持ち、多角的考察ができるよう、幅広い教養科目として提供している総合科目についてポジティブな意見が多くみられた。しかし、要望の中に「総合科目でオンライン授業があり、教員が資料なしでただ話しているだけの科目があり、少し内容を理解しづらかった」とのコメントがあった。オンライン授業については年々ブラッシュアップを行い、資料の配布や動画の作成などコンテンツの改善を実施している。今後も学生自身の大学生活、さらに社会生活の中の一助となるように貢献したい。

『総合教養』

- ・情報系の内容を幅広く学ぶことができた。また、内容が単純に面白かった。
- ・教養はなににでも使えるものなので教師目指してないからなでえらばず授業に行ってみてほしい
- ・教職課程を履修するならば必ず履修しないといけない授業なので、教職を取るかまよってれば、履修しておいた方がよい。

『現代社会を考える 1』

- ・現代社会を生きる上で様々な事を学べた。

『日本語活用法』

- ・ES や文章を書く際のポイントを教えてくれた。

『日本語上達法 1、2』

- ・意外と学ぶ機会が少ない日本語の使い方や文章構成について学べる点で良かった。

『発達心理学』

- ・人の発達について知ることは役に立つと考えるからです。
- ・大人に近づく立場で子供の心理がどうなっているか印象に残りました。

『日本国憲法』

- ・日本人にとって覚えておくべきことが学べる。
- ・現代社会について少し知れたこと

『アジアの言語と文化』

- ・アジアの知識について学べた

『情報社会と情報倫理』

- ・授業がとてもわかりやすかったです。
- ・一度単位を落としたのが印象に残っているのと、情報リテラシーの基礎について学べるので後輩に推薦したいです。

『企業社会と労働』

- ・ただ授業をするだけでなく、軽い雑談があったりと毎回授業が楽しみでした。

『企業と倫理』

- ・ただ授業をするだけでなく、軽い雑談があったりと毎回授業が楽しみでした。

『経済学の世界』

- ・ニュースなどのことを深く教えていただけます。
- ・世界の市場情報で働き方の思考能力

『大阪の歴史と文化』

- ・教員がしっかりと文を見てくれたから。

(2)総合科目(英語以外の外国語科目)について

初修外国語となる英語以外の外国語に対してポジティブな意見が多くみられた。要望としては、「外国語教育の充実。英語や中国語以外の言語も必要だと考えています。」という英語以外の外国語の学修機会提供に関するコメントが見られた。現時点で本学は、英語と中国語のみの提供であるが、人間科学教育研究センターとして多くの語学学修の機会を提供できるよう尽力する。

『中国語』

- ・理解しやすいし、軽い会話や読解程度なら十分力がつく。
- ・第二外国語としてはわかりやすかったため
- ・初めての英語以外に学んだ外国語で、中国に興味を持つきっかけとなったから。

『ドイツ語』

- ・第三言語として興味を持つキッカケとなった。

(3)総合科目(スポーツ実習)について

スポーツに関しては、寝屋川キャンパス・四條畷キャンパスの両キャンパスで「運動の楽しさ」を味わえたコメントが多くみられた。同時にスポーツ実習1のねらいとしている『学生生活を円滑にするための仲間づくり(スポーツコミュニケーション)』の効果に関するコメントが多くみられた。その一方で「スポーツ施設の充実」を要望しているコメントがあり、学生が自主的に活動できるスポーツ施設の拡充について検討を継続していく。

『スポーツ実習』

- ・スポーツのおもしろさを味わえた。
- ・スポーツを通して友人を作ることができた
- ・友達作りがしやすい
- ・友情が深まった
- ・仲良くなれた
- ・運動を通してコミュニケーションがとれた
- ・普段の学校生活で話さない人と話せた
- ・友人が出来た。
- ・コロナ禍で自宅から出るタイミングがあまりなかったのですが、この講義で外で運動する機会があり体になることがなかった。
- ・運動不足が直る。
- ・健康になった。
- ・教員も生徒のように楽しくて楽しかった
- ・運動することの大事さを学べた
- ・体育館やグラウンドなど広い場所で体を動かせる。

2023 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2024 年 6 月 12 日
英語教育研究センター
2023 年度主任 杉村 寛子

2023 年度の総括

2020 年度より開始された新カリキュラムにおける「総合科目（英語科目）」に対する評価として、寝屋川キャンパスは昨年度より 0.1 ポイント上がり、5 段階評価で 3.6 ポイント、四條畷キャンパスは前年度に引き続き 3.5 ポイントとなり、大学全体としては平年並みであった。自由記述（印象に残る科目およびその内容）においては、寝屋川では 9 件、四條畷では 6 件、英語に関する言及があった。

寝屋川キャンパスの記述内容としては「おもしろかった」（1 件）「楽しかった」（1 件）という漠然とした感想もあれば、「英語の会話や発音の機会を得られ、興味深い授業だった」（4 件）という、2020 年度カリキュラムで導入したリスニング力およびスピーキング力の涵養を目指す科目による影響が見られるコメントがあった。また「英語に力を入れるべきである」（1 件）のように、英語の必要性を強く感じ、今後本学の英語教育の展開に期待を寄せるコメントもあった。他方、改善を求める意見としては「英語のレベルが低く、社会に出て使えない」（1 件）という厳しい声もあった。英語科目においてはプレースメントテストによってレベル別クラス編成を行なっているにも関わらず、傾斜評価が実施できない時間割上の制度的問題があるため、レベルごとにはではなく、科目ごとに統一シラバス（統一教科書使用）に基づく授業を展開しており、今後も飛び抜けて英語の習熟度の高い学生にはこのような不満が残ることは避けられない。これを大学全体の問題として捉え、時間割設定の改革を求めたい。

四條畷キャンパスの記述内容として「映画の字幕翻訳の授業が興味深かった」（2 件）「プレゼンテーションの授業で力がついた」（1 件）「2 年生になり、履修者が少ない中、リーディングの授業を履修し、英語への嫌悪感がなくなった」（1 件）と、2 年生以上が履修できる科目を履修した学生から高い評価を得ることができた。卒業要件単位の取得のみを目的せず、自らのやる気や興味から英語を学習し続けた学生からの評価はカリキュラム改革が功を奏した証左と考える。一方、「英語の学びにおもしろさを感じなかった」（1 件）「中学や高校の英語と同じようなことを学習し、かつてつまずいたところで結局大学においてもつまずくので、英語力が身についたとは思えない」（1 件）というマイナスの意見もあり、これは教室を預かる教員の努力を要する問題でもある。

2025 年度に向けての展望

2020 年度より、1 年次生用に（「書く」および「話す」も適度に取り入れた）「読む」および「聞く」を中心とした科目から構成されるカリキュラムを開始させ、入学時より 4 技能の均衡が取れた英語学習を保証している。さらに 2 年次および 3 年次において、積み上げ式の学習過程を想定し、学生が伸ばしたいと思う技能に特化した科目を選択し、学習を続けることができるようにしている。特に寝屋川キャンパスでは、英語資格試験 TOEIC を念頭に置いた資格対策系科目を開講し、英語学習継続の動機づけの一つとしている。今年度から開始したカリキュラムでは、2020 年度カリキュラムの枠組みを大幅に変えることなく、本学に入学してくる学生の実態に即した形で教科書の選定を行ない、教育方法に改善を加えながら、教員一丸となって取り組んでいる。

機械翻訳の精度の高まりのみならず、生成 AI の台頭による影響は、少なからず英語教育に及んでいる。しかし、文法知識に基づき構文を正しく分析できる力と、英文の意味内容を正確に理解できる力を身につけ、一定のレベルまで自らの力で英語と向き合える学生を育て、社会に送り出したい。またアカデミックな目的から需要の高い、外国人教師による「EIGOP」や、課外における英語学習のサポートや TOEIC をはじめとする資格検定試験対策などの助言を行なう、日本人教師による「イングリッシュ・カフェ」を展開しており、これらのプログラムも引き続き充実させ、機能させていきたいと考える。

2023 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2024 年 5 月 16 日
 数理科学教育研究センター
 2023 年度主任 梶木屋 龍治

1. 設問[A]について

AS センターが主に関係する項目は 1～6 であると思われる。基礎専門科目として、数学と物理学の講義・演習と実験では重点を置いて教育している項目である。大学全体では「1 幅広い分野にわたる教養」(2022 年度の平均 3.8)が 3.9 と+0.1 ポイントの上昇がみられた。他の項目については、「2 専門的な知識・技能」(2022 年度 4.0→2023 年度 4.0)、「3 物事を論理的に考える力」(2022 年度 3.9→2023 年度 3.9)、「4 的確な判断力」(2022 年度 3.7→2023 年度 3.7)については昨年度比で変わらず高評価を維持できた。これらの数値は AS センターが特に力を入れている数学・物理科目の基礎学力向上の取り組みの成果が表れているものと考えられる。

表1に学部ごとの伸びをまとめた。工学部、総合情報学は 0.1 ポイント上昇した項目がみられる。さらに、情報通信工学部では、0.2, 0.3 ポイント上昇した項目が複数ある。これらの結果から、これまでの我々の取り組みが実を結びつつあることを伺わせる。

表1
 学部ごとのポイントの伸び【2020 年度(2019 年度)Δ変化】

	工学部	情報通信工学部	医療健康科学部	総合情報学部
1 幅広い分野にわたる教養	3.9(3.8)Δ+0.1	3.9(3.7)Δ+0.2	4.0(4.0)Δ0	3.9(3.9)Δ0
2 専門的な知識・技術	4.0(3.9)Δ+0.1	4.1(3.9)Δ+0.2	3.9(4.1)Δ-0.2	4.1(4.0)Δ+0.1
3 物事を論理的に考える力	3.8(3.9)Δ-0.1	3.9(3.7)Δ+0.2	3.9(3.9)Δ0	3.9(4.0)Δ-0.1
4 的確な判断力	3.7(3.7)Δ0	3.8(3.5)Δ+0.3	3.8(3.8)Δ0	3.8(3.8)Δ0
5 知識やツールを組み合わせて課題に取り組む力	4.0(3.9)Δ+0.1	4.1(3.8) Δ+0.3	3.8(3.9)Δ-0.1	4.1(4.1)Δ0
6 考えていることを図解などで表現できる力	3.8(3.8)Δ0	3.8(3.6)Δ+0.2	3.6(3.7)Δ-0.1	3.7(3.8)Δ-0.1

2. 設問[B]について

AS センターが関係する項目は 4 と 5 であり、大学全体では「4 基礎専門科目・専門科目(講義)」3.9、「5 基礎専門科目・専門科目(実験・実習・演習など)」4.0 と昨年度と同水準を維持している。[B]の平均が 3.7 であることから、相対的に良い評価を得ていると言える。表2に学部ごとの伸びをまとめた。工学部、情報通信工学部と医療健康科学部ではポイントの伸びがみられる。

表2
 学部ごとのポイントの伸び【2020 年度(2019 年度)Δ変化】

	工学部	情報通信工学部	医療健康科学部	総合情報学部
4 基礎専門科目・専門科目(講義)	3.9(3.8)Δ+0.1	3.9(3.8)Δ+0.1	4.0(3.9)Δ+0.1	3.9(4.0)Δ-0.1
5 基礎専門科目・専門科目(実験・実習・演習など)	4.1(4.0)Δ+0.1	3.9(3.9) Δ0	4.0(4.0)Δ0	4.0(4.0)Δ0

3. 自由記述について

AS センターに直接的に関係する内容は限られているが、授業に関する具体的な意見が出されており、授業改善への指針として貴重なものであるといえる。今後のカリキュラムマネジメントと各科目の講義へフィ

ードバックをかけるために慎重な分析を進めたい。

(1)数学系科目に関する意見として、「数学科教育法:教科書では学べないことを色々な視点で学ぶことができる点において数学を深く学べた。」、「数学科教育法 1、3:解くではなく、教えるという目線は教員になる上で役立つ。」、「数学教育法 2、4: 指導案の作成方法を詳しく知れて実習で役立った。」、「数学科教育法 1: 解答・解説がわかりやすい。」、「微分積分・演習: 微積が好きな上、授業の雰囲気がよく聞きやすかった。」、「多変数の微積分・演習: 微積が好きな上、授業の雰囲気がよく聞きやすかった。」、「ベクトルと行列 1、2: 授業の初めに前回の復習がされるため、遅れをとることがない。」、「常微分方程式: ゼミの研究内容の基礎となる内容だった。」といった専門の学びへつながる学習ができていることを評価する意見が見られた。

(2)物理科目に関する意見として、「物理学実験: これまで習ったことを前提に実験することが楽しかった。」、「物理学実験: とくに役に立った。印象に残っている科目である。」、「授業での解説がわかりやすい。」等の意見や、物理学実験について、1 年生でさまざまな現象に触れることができた。など、評価する意見が見られた。

4. まとめ

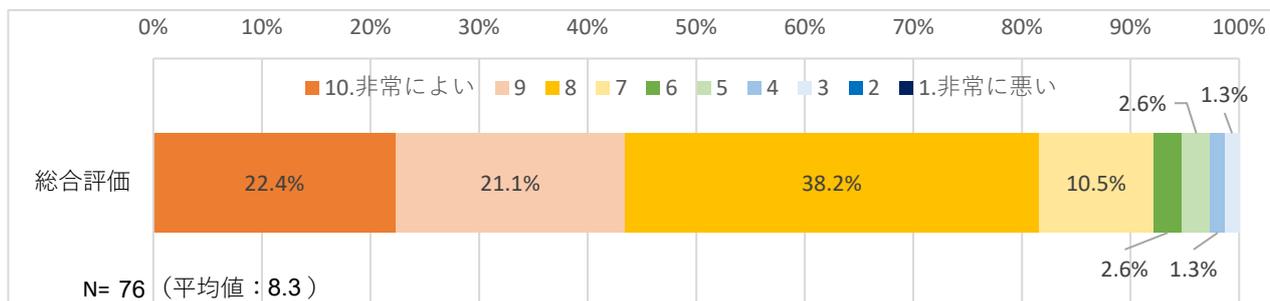
AS センターの専任教員・非常勤教員は、1～2 年次生の授業を数多く担当しており、今までに培ってきた授業の工夫やノウハウは蓄積され、これを共有してきている。数学、物理の講義、演習、実験は本学全体の様々な専門教育を行っていく上で基礎となる科目であり、非常に重要な科目である。数学、物理の講義・演習科目、実験科目を 1、2 年生のときにしっかり身につけることは、専門科目の理解と習熟のために必要なことである。共通教育機構では、さらに授業のねらいや目的を明確にし、習熟度別クラスの編成、専門科目との連携を強化して、全学的な基礎教育の充実を目指している。また、時折発生する学生からの注文や意見に対しても迅速に対処できる体制を整えている。AS センターでは、入学時のプレイスメントテストを実施して、習熟度別クラスによる授業運営を推し進めてきた。

今後も、共通教育機構としての役割を果たせるよう、習熟度別クラス間の調整、基礎専門科目と専門科目の連携を深めていきたい。

2023年度 修了生満足度調査

大学院全体：集計結果

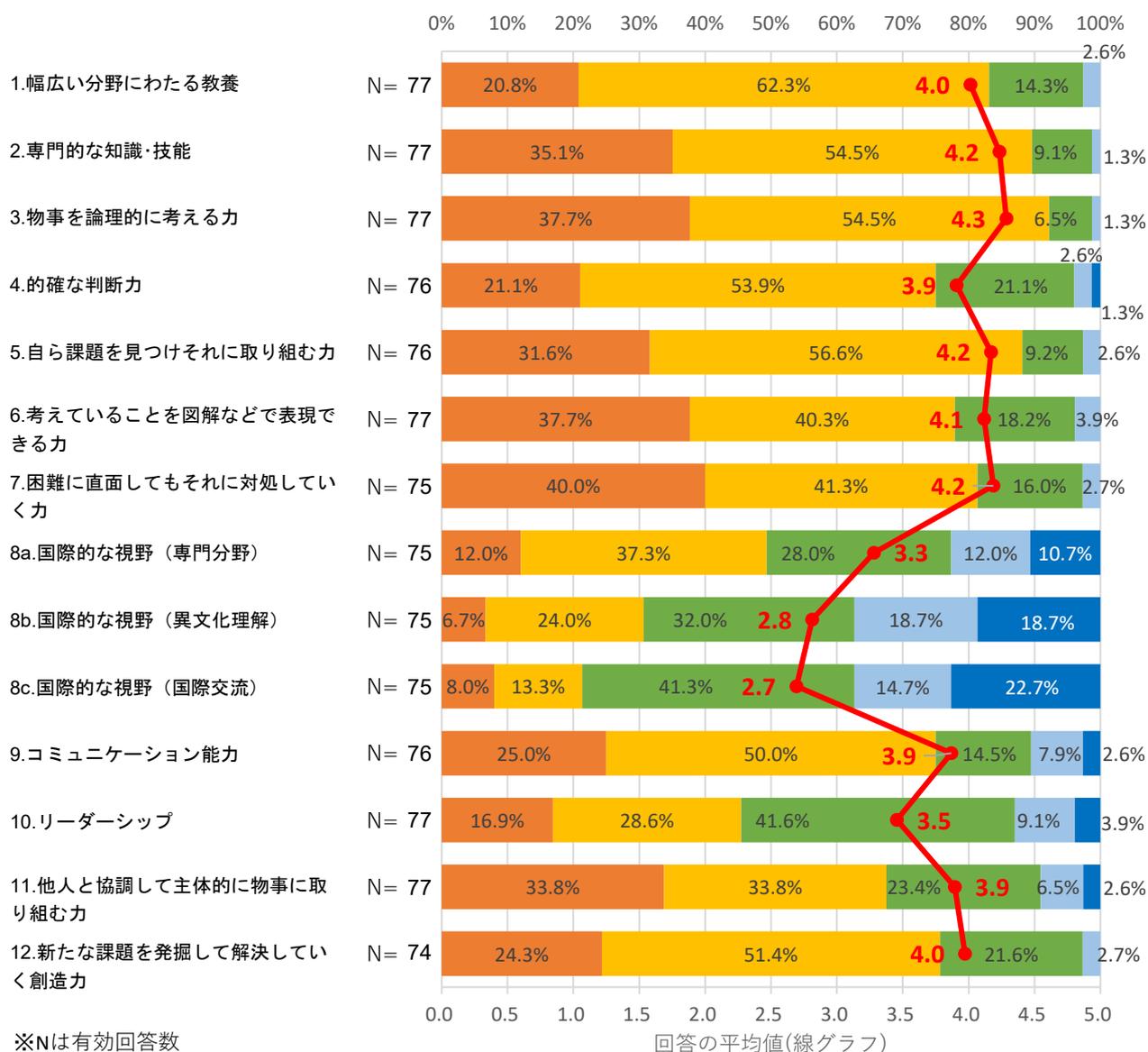
◆あなたが本学の大学院で経験した教育について全体として考えて、総合評価を1～10の10段階で評価してください。



◆本学での大学院生活をとおして、あなたは次のような知識や能力などをどの程度獲得したと思いますか？

■ 5.十分獲得した ■ 4.ある程度獲得した ■ 3.どちらとも言えない ■ 2.あまり獲得していない ■ 1.獲得していない

選択肢別の割合(棒グラフ)



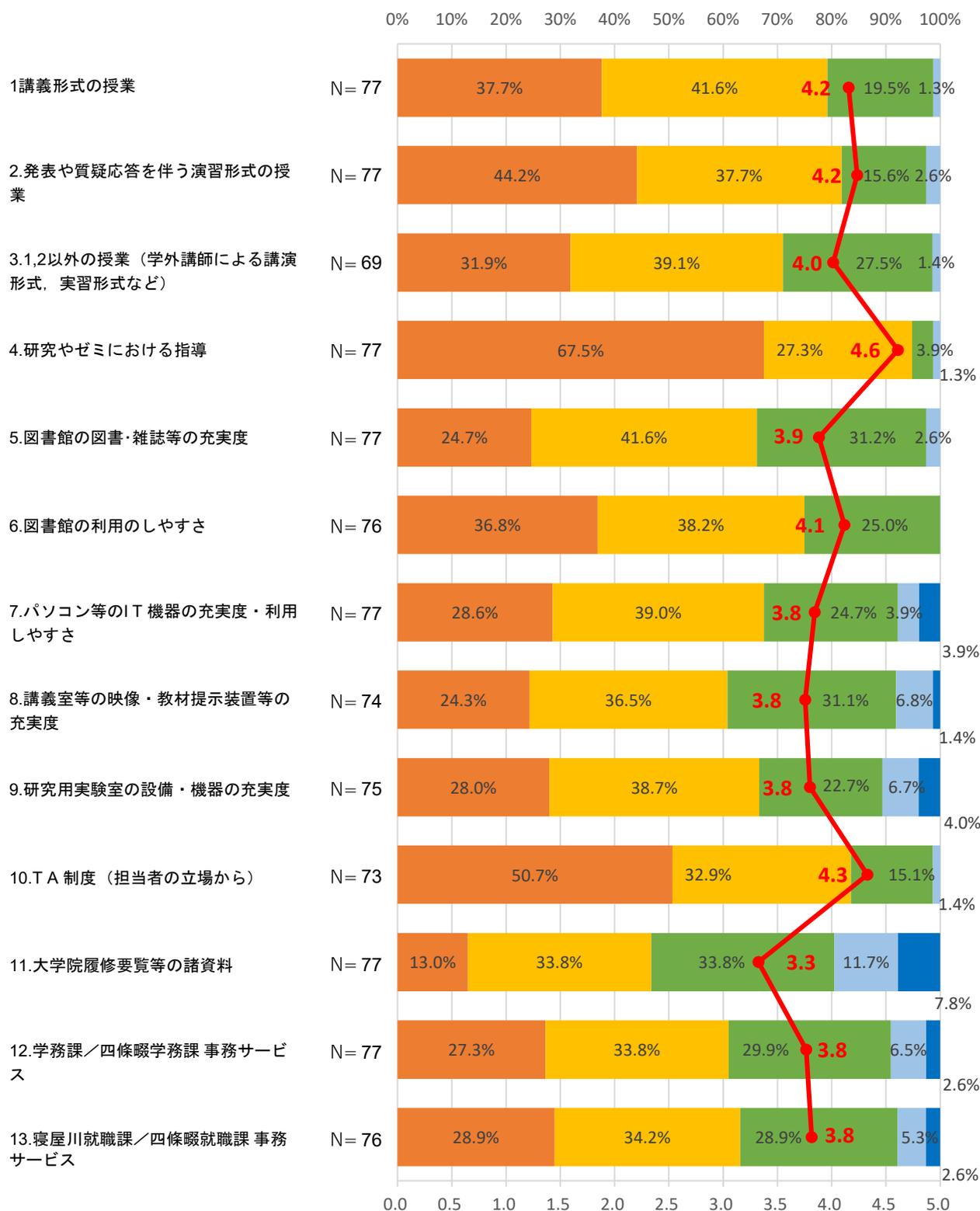
2023年度 修了生満足度調査

大学院全体：集計結果

◆本学での大学院教育を振り返り、以下の授業科目群や設備・機器などについて、全体的に評価してください。

■ 5.よかった ■ 4.ややよかった ■ 3.ふつう ■ 2.やや悪かった ■ 1.悪かった

選択肢別の割合(棒グラフ)



※Nは有効回答数

回答の平均値(線グラフ)

大学院

2023 年度

「修了生満足度調査結果の検討」

2023 年度修了生満足度調査結果検討報告書

2024 年 6 月 12 日
工学研究科先端理工学コース
2023 年度主任 森田 成昭

2023 年度は 6 名の学生が工学研究科先端理工学コースにおいて博士前期課程を修了した。その満足度調査の結果、総合評価では 10 点満点の平均が 8.8 点(標準偏差 1.1 点)であり、前年度の 8.2 点と比べて向上した。また、大学院全体の平均 8.3 点(標準偏差 1.3 点)と比較して、先端理工学コースにおける評価が高いといえる。総合評価の推移をみると、8.1 点(2017 年度)、8.1 点(2018 年度)、6.3 点(2019 年度)、7.7 点(2020 年度)、7.8 点(2021 年度)、8.2 点(2022 年度)、8.8 点(2023 年度)となっており、COVID-19 の影響を受けて一時的に下がったが、急激に回復し、この 3 年間は連続して上昇していることがわかる。

[A] のさまざまな知識や能力をどの程度獲得できたか、という問いに対して、5 点満点の平均が 3.6 点であり、前年度と比較して僅かに(0.1 ポイント)上昇しているものの、大学院全体の平均(3.8 点)より低かった。「専門的な知識・技能」や「物事を論理的に考える力」の評価は前年度と比較して上昇し、大学院全体と比較しても高かったが、逆に、「国際的な視野」、「リーダーシップ」、「他人と協調して主体的に物事に取り組む力」といった評価が前年度と比較して低下し、大学院全体と比較しても低い傾向がみられた。2023 年度は先端理工学コース全体で延べ 25 件の学生による学会発表が行われ、大学院生として個人的な専門スキルを与えることはできたが、大小様々な規模におけるグループ活動の経験を与えることができなかったのではないかと考えられる。今後、留学生や客員研究員の招聘、国内外の研究プロジェクトへの参画、産官学連携、等を増やすなど、バランスのとれた教育を行いたい。

[B] の授業科目群や設備・器機などについては、5 点満点の平均が 3.9 点であり、前年度と比較して僅かに(0.2 ポイント)上昇したが、大学院全体の平均(4.0 点)より僅かに低かった。「研究室やゼミにおける指導」の平均は 5.0 点であり、全ての修了学生に高く評価され、2022 年度の平均も 4.8 点であったことから、質の高い研究指導が行われていると判断できる。その反面、「講義室等の映像・教材提示装置等の充実度(平均 3.3 点)」、「パソコン等の IT 器機の充実度・利用しやすさ」(平均 3.5 点)といった項目の評価が低く、設備の更新も求められているが、学生の ICT スキルが以前よりも向上しており、最先端の設備の導入が必要になってきていると感じた。

自由記述で特に気がついたこととしては、「学会発表」、「国際会議」、「海外出張」、「他大学との交流」といったキーワードがみられ、充実した研究と、その成果発表の場を与えることができたといえる。しかし、「他の研究室との交流機会をもっと増やしてほしい」との意見もあり、専門的な研究を行うだけでなく、自らの考えや成果を対外的に発信し、議論を深めたいという力強い向上心も感じられた。先端理工学コースとしては、ゼミナールの授業において対外的に発表し、他研究室の教員や学生と議論をする場を与えているが、研究討議がさらに深化するように力添えをしていきたい。また、「大学の権限で読めるオンラインの論文の範囲を広げてほしい」という意見があり、購読雑誌の数を減らしてきた影響が見られた。本学では文献購入のサポートを受けることができるので、学生が論文を読みたいと思ったときに、指導教員に相談できる雰囲気をつくることも大切である。

先端理工学コースにおける 2023 年度修了生の進路決定率は 100%であり、概ね大学院における研究教育に満足して、新たなステージに躍進していったのではないかと考えられる。

2023 年度修了生満足度調査結果検討報告書

2024 年 6 月 7 日
工学研究科電子通信工学コース
2023 年度主任 海老原 聡

2023 年度修了生満足度調査の自由記述に基づき、検討結果を報告申し上げます。

良かった点

以下のように、学会や院ゼミを通じて、研究発表の機会をえて、これが力になったという回答が多かった。これは専門知識を授業で深掘するだけでなく、コミュニケーション能力を養成することを本コースで重視しており、この成果がでていると考えられる。

「ゼミナールによって、定期的に研究をまとめ、発表する期会があった点。」

「研究発表する機会がたくさんあったのでどのように話すと理解してもらえやすいのかを経験できた」

「学部生では滅多に経験できない、学会発表や30分にも渡る発表などが出来たこと。」

改善すべき点

以下のように、他分野の研究者・学生との交流が不足している記述が多かった。今後、まずは、同じコース内での出身学科間の交流を促進することを検討したい。

「もう片方の学科の院生との交流が少なかった。そのため自分分野以外の理解があまり進まなかった」

「他大学との交流や四條畷に通う学生との交流ができると良かったと思う。」

「他のコースの院生との交流の場が一度はあるとよいと思う。」

「同じコースの別学科の学生との交流できる場があれば良いと思います」

「大学で学んでいない分野は理解しにくい。」

施設に関しては、以下のように、研究室の狭さ、研究室間の仕切りが無いことによる騒音に関する苦情が多かった。大学院生が集中して研究活動できる空間が不可欠であると認識している。

「研究室が狭く、オープンスペースばかりで使いづらい。」

「研究室のオープン化によって、周囲が常に騒がしく、人の往来も多いので研究に集中しやすい環境とは言えない。」

「学部生が研究室配属前の友人グループと集まるが多くなり、ゼミ内でのつながりが生まれにくくなっている。」

「大学院生用の教室がなく、研究室にしきりが無く周りの音がすごく聞こえてきて集中できない」

「研究室の狭さ、設備の充実さを増やしてほしい」

「大学院生用の密閉された教室をつくってほしい。」

その他

獲得度の調査では、異文化理解や国際交流が低い評価であった。国際会議での発表や海外での研究発表を通じて、海外の文化や人を接触する機会を多くすることを検討していきたい。

以上

2023 年度修了生満足度調査結果検討報告書

2024 年 6 月 12 日
工学研究科 制御機械工学コース
2023 年度 主任 月間 満

2023 年度修了生の総合評価は、平均 7.9 点(10 点満点、N=17)であった。これは、2022 年度の平均 8.2 点と比べて 0.3 ポイントの低下である。評価点分布を見ると、8 点以上が 14 名、7 点、5 点、3 点がそれぞれ 1 名ずつであった。特に 5 点や 3 点という低い評価点は、やや強い不満を表しており、改善が必要と考えられる。

以下、項目別に詳しく見ていく。

項目 A:「獲得した知識・能力」

項目 A の平均点は 3.7 点(5 点満点)で、昨年度の 3.3 点を上回っていた。14 個の全ての細目についても、ほとんどの項目が昨年度と同等または上回っていた。修了生が大学院生活を通じて自らの成長を感じているという点は、評価できる結果といえる。自由記述欄を見ると、「学会発表」や「学外活動」を通して「良い経験」が積めたというコメントが 7 件と最も多く、「発表方法や話しの進め方」、「知見」、「人として成長」などの記載が見られた。一方、「国際的な視野」の項目は昨年よりも評価点は高かったものの、2 点台にとどまっている。これは、コロナ禍の下で、国際会議への参加など様々な制限があったことが影響していたと考えられる。しかし、今後はコロナ禍の終息と共に回復していくものと期待される。

項目 B「授業科目群や設備・機器」

項目 B の平均点は 3.9 点(5 点満点)で、昨年度の 4.0 点とほぼ同等であった。しかし、各細目を見ると、評価点の高い細目と低い細目とに二分しており、評価点の低かった細目を以下に列挙する。

- ① パソコン等の IT 機器の充実度・利用しやすさ
- ② 講義室等の映像・教材提示装置等の充実度
- ③ 研究用実験室の設備・機器の充実度
- ④ 大学院履修要覧等の緒資料
- ⑤ 学務課事務サービス
- ⑥ 就職課事務サービス

上記のうち、①～③は設備の老朽化に関する内容であり、自由記述欄から関連する内容をピックアップすると、「研究室で使えるワークステーションが少ない」、「演習室の開放時間が短すぎる。夜まで使いたい」、「J 号館 7 階の PC を使える時間が少ない」、「研究で CAD を利用する際、非常に苦勞した」等が抽出された。これらは、特に CAD 用 PC に対する不満を表しており、該当する研究室における CAD 用 PC のスペック確認と、必要に応じた更新が必要である。

④～⑥は学務課や就職課等の事務サービスに係る内容である。自由記述欄からピックアップすると、「履修登録が学部と比べ非常にわかりにくく、学務課の対応も良くない」、「大学院生用の履修登録サイトを作成してほしい」、「大学院の履修や申請物など、学部の時と比べてかなり雑に感じた」、「履修や事務手続きのサポートが少なかった」等が見られた。大学院生の人数は学部生よりも極端に少ないため、学部生と同等のサービスの提供は難しいが、少なくとも学内システムには慣れていることから、履修システムの改善を、学務課には検討頂きたい。

また、2023 年度修了生は、新棟への移転を経験した世代であり、自由記述欄から、「研究室が狭く、作業スペースが少ない」、「院生の多い研究室では、学部生と院生が A 号館で活動できない」、「研究室の隣が吹き抜けで声が響く」、「研究スペースが開放的で落ち着かない、学習スペースが遊んでいる」等のコメントが見られた。これらは短期的な解決は難しいものの、大学院生にとって研究環境の維持や静粛性はたいへん重要な課題と思われ、今後、運用方法も含め、改善に向けた検討が必要である。

以上のように、2023 年度修了生は、その大半をコロナ禍で過ごすと共に、新棟へ移転を経験した世代という点で、特殊な状況下にあった。前者は、コロナ禍の終息に伴い、今後改善が見込まれるものの、後者は、短期的な解決が難しいながらも重要な課題と認識され、今後、継続的な改善検討が必要である。

以上。

2023 年度修了生満足度調査結果検討報告書

2024 年 6 月 12 日
大学院工学研究科情報工学コース
2023 年度主任 古崎 晃司

今年度の当コースの総合評価(8.4 点)は、過去 5 年間(2018 年度:10.0, 2019 年度:9.0, 2020 年度:7.8, 2021 年度:9.0, 2022 年度:7.3)と比較すると、2018, 2019, 2021 年度よりは低いが、2020, 2022 年度よりは高く、今年度は過去 5 年のなかで中ほどの点であった。今年度の修了生数は 11 名であったが、2018・19 年度は 4 名以下、2020 年度は 6 名、2021 年度は 7 名、2022 年度は 9 名であり、標本数が少ないことから評価点自体を単純に比較するのは難しい。しかし、2022 年度修了生が大学院在学期間中におけるコロナ禍の体制から通常体制への移行に伴う「度重なる状況の変化」が低評価に影響を与えたものと思われることに対し、今年度の修了生はそれらの影響が落ち着き通常の状態が回復したことで評価が好転したものと思われる。

授業に関しては、コロナ禍には遠隔で実施していた科目が、昨年度から面接形式の講義で行われるようになった。ただし、コロナ禍に実施した遠隔講義のノウハウやメリットも考慮して、発表形式の「ゼミナール」については、大学院生以外の学部生の聴講参加をオンラインで可能とするなど、一部にオンライン講義も取り入れることで教育環境の一層の充実を図る方策を今年度も継続した。このような改善点が定着してきたことの影響もあったと思われるが、講義に関する評価はすべての項目において昨年度よりも平均点が上昇しており、1 名を除いて 4-5 点としていることから、十分な教育環境を提供することができたと考えられる。ただし、講義の履修方法については「大学院履修要覧等の諸資料」の評価がやや低い点や、自由記述においても履修登録の分かりづらさの指摘がある点など、改善の余地がある。

主に研究に関連する、教養、知識・技能、論理的思考力、判断力、創造力等の指標についても、講義と同様に昨年度に比べてほぼすべての項目において平均点の上昇が見られ、1 名を除いて 3-5 点としている。特にゼミにおける研究指導と演習形式の授業、それに伴う能力の取得に関する評価が、他の項目に対して高くなっており、大学院教育の中心となる研究指導が適切に行えた結果であると思われる。なかでも「専門的な知識・技能」、「考えていることを図解などで表現できる力」と「新たな課題を発掘し解決していく創造力」の評価が高い。自由記述においても、ゼミナールでの発表や学会発表を通して得られた経験について複数の回答があり、学会発表を行い、修士論文を仕上げたことに加え、インターンシップが中心となる就職活動においても自主的に行動し内定を勝ち取ったという体験が大きな自信につながったものと思われる。

国際的な視野に関する評価については例年は非常に低かったのに対し、今年度の修了生はコロナ禍が明けたことで海外に出張する機会を持てるようになったこともあり、評価が向上した。国際会議に参加する大きな意義は海外の研究者と対面で交流することであり、学生の評価からもその効果が強く窺える。今後も学生が海外の国際会議に出張できる見込みであり、学生の国際的な視点を身に着けることができる機会を継続できるようにしたい。一方、リーダーシップや協調性に関する評価については、昨年度と同様に低くなっているのが気になる。学部生があまり来ない研究室もあることや、アンケートの自由記述に「学部生・院生の交流が少ない」という意見もあることから、今後、大学院生が学部生を指導する機会を多くすることでリーダーシップの力を養うなどといった工夫を考えたい。

最後に、昨年度に引き続き、自由記述として新棟の研究室に関する意見が複数あったことを指摘しておく。新棟はオープンスペースのコンセプトの下に設計されているが、修了生からは周囲からの音漏れ、個人スペースやプライバシーに対する不満や要求が出されている。研究室の大きな魅力の一つが独自の空間で自分の研究に集中できる点にあり、それが大学院進学への動機の一つの大きな要因になっていることが、この点からも分かる。大学院生が研究を集中して行うことができるスペースの確保を検討するなど、学生が満足して研究に没頭できる環境の在り方を全学的に今後も追求する必要があると考える。

2023 年度修了生満足度調査結果検討報告書

2024 年 5 月 15 日
工学研究科建築学コース
2023 年度主任 辻 聖晃

[A]本学での大学院生活をとおして、あなたは次のような知識や能力などをどの程度獲得したと思いますか？

概ね高い獲得度との評価であるが、特に「国際的な視野」の獲得度が低いのが目立つ。建築分野では、最先端の技術が国内で開発されたり使用されたりしている事例が多く、英語文献の講読や英語による講義の重要度はあまり高くない。「実学」を重視する本学にあっても、大学院博士前期課程においては、まずは国内の文献や事例を母国語で十分に咀嚼したうえで、海外の文献や事例を外国語で学ぶことが望ましい。この意味で、博士前期課程の講義科目では、国際的視野を最優先した授業は実施しておらず、学生自身が「獲得度が低い」と感じることはやむを得ない。しかしながら、今後の建築分野のグローバル化を見越して、国際的な視野を身につけることの重要性には異論がない。そこで、大学院博士課程の授業科目においては、国際的な視野の獲得を意識した授業回を設けることを、授業計画の策定においては推奨することとする。

[B]本学での大学院教育を振り返り、以下の授業科目群や設備・機器などについて全体的に評価してください。

概ね高い評価であるが、特に研究設備や事務サービスに関する項目の評価が低い。研究設備については、外部資金の獲得による充実を目指したい。履修要覧などの資料や、学務課・就職課のサービスは、コースだけの努力で改善することは難しいため、事務と連携しながら改善に努めたい。

[C]あなたが本学の大学院で経験した教育について、全体として考えて、総合評価を 1～10 の 10 段階で評価してください。

概ね高い評価であるが、ややばらつきがある。できるだけ全員が 10 の評価を回答できるように、コースの教員全員で、教育・研究環境の向上を目指したい。

自由記述について

改善すべき点として、院生室の環境改善を望む声が大半を占めた。これは当初より予想されたことで、コースとしても大学に改善を申し入れていた点である。2024 年度より、将来構想スペースの一角に大学院スペースが設けられたため、2023 年度までよりは状況は改善されていると考えられるが、依然として談話スペースとは物理的な境界がなく隣接しているため、研究教育とは無関係の会話や、食事時の臭気が無制限に流入する状況となっており、他大学に誇れる大学院スペースとは到底なっていない。コースの努力のみで改善することは難しいため、大学と協力しながら継続的に環境改善を目指したい。

2023 年度修了生満足度調査結果検討報告書

2024 年 6 月 13 日

総合情報学研究科デジタルアート・アニメーション学コース

2023 年度主任 山路 敦司

まず大きく注目すべき点は、2022 年度と比較し、[A]や[B]の評価ポイントが全体的に下がっていることである。特に、総合評価[C]が 9.0 から 7.0 に大幅に低下している点については、真摯に受け止め反省しなければならない。これにはコロナ禍によるコミュニケーション不足やオンライン学習環境の変化、国際交流プログラムの制限などが主な要因として挙げられるものの、根本的な問題は、大学院教育における学生へのモチベーションの刺激や研究や制作に対する学習環境の充実に対する不足にあると考える。

また、自由記述においては「学外との交流の機会の不足」「学内での学部生との交流の不足」「合同ゼミの不足」などが指摘されている。一方で、高い評価を受けている点には「(映像から)社会を学ぶことができる」「他人の話聞きながら視野を広げる」といった記述もあり、やはり学外・学内におけるコミュニケーションの機会が総じて不足していたことが反省すべき点として挙げられる。

この問題に対処するためには、学外での学会発表や展示発表の機会をこれまで以上に増やし、また学内での学部生や他の院生との交流や合同ゼミなどを積極的に進めるなどの改善が必要である。同時に、これらの改善は学部からの内部進学者を確保する上でも重要であると考え、コース全体でこれらの問題意識を共有しながら、今年度は昨年度よりも評価が上がるよう努力したい。

なお、2023 年度修了の院生の進路決定率は 100%であったことを付け加えておく。

2023 年度修了生満足度調査結果検討報告書

2024 年 6 月 7 日
大学院総合情報学研究科デジタルゲーム学コース
2023 年度主任 魚井 宏高

今回の調査結果では、知識や能力の獲得に関する質問[A]は 4.0(2022 年度:3.8, 2021 年度:4.2, 2020 年度:3.9), 大学院教育や設備・機器に関する質問[B]は 4.2(2022 年度:4.0, 2021 年度:4.2, 2020 年度:4.0), 教育の全体を考慮した総合評価[C]は 9.1(2022 年度:8.1, 2021 年度:8.8, 2020 年度:8.2)といずれも前年度より改善された評価となった。さらに前々年度(2021 年度)との比較でいえば同等以上の評価であり、また、2023 年度の大学院全体の平均値よりもわずかながら高評価である。したがって、2023 年度の本コースの評価は上昇傾向にあると見て良いだろう。しかしながら、このような高評価の理由がどこにあるかが自由記述からではあまり捕らえられないものの、大局的には教員個々人の努力によるものであると思われる。

個別に見れば、[A]の「専門的な知識・技能」が 4.6 と前年度よりも評価上昇傾向で、[B]の「研究やゼミにおける指導」も 4.6 と非常に高いままである一方、[A]の「国際的な視野(国際交流)」のみが 2.7 と前年度よりも低く、これが評価の足を引っ張っている一因である。また、[B]では、「図書館の利用しやすさ」が 3.8 と前年度同様に低い評価である他、「就職課 事務サービス」が 3.9(前年度 3.6)と向上はしたものの比較的低い評価であった。「図書館の利用しやすさ」については、例年のことでありデジタルゲーム学コースという分野的な関係上、研究テーマに関連する蔵書数を取り揃えるのが困難であるという理由から解決はむずかしいと思われる。

評価 3 以下の回答がなかった項目(全員が 5 か 4 の高評価とした項目)が昨年度よりも増えてはいるものの、回答人数が 7 人であることからあまり有意とは言えない。また、上述のとおり、[B]の「研究やゼミにおける指導」も 7 人中 4 人が評価 5 としている(平均評価:4.6)。これらの項目の高評価が維持される限り、大学院の授業および研究室運営に携わる側としては満足である。

逆に、評価 2 が存在する項目は先に取り上げた[A]の「国際的な視野(国際交流)」以外に、[A]の「リーダーシップ」、「他人と協調して主体的に物事に取り組む力」や[B]の「発表や質疑応答を伴う演習形式の授業」、「大学院履修要覧等の諸資料」と 5 項目存在し、これらの改善に取り組むことが今後の課題とも言える。また自由記述において、大学院の学生でも学部生と同じように演習に用いられている高度なアプリケーションを自由に使いたいとの意見が散見され、これについては対応を検討したいと思う。

以上

2023 年度修了生満足度調査結果検討報告書

2024 年 6 月 13 日

大学院総合情報学研究科コンピュータサイエンスコース

2023 年度主任 升谷 保博

本コースの総合評価の平均値は、2021→2022→2023 年度で 7.3→7.3→7.3 と推移しており、2020 年度(8.2)から低下したままになっている。一方、大学院全体としては、8.1→8.1→8.1 と推移しており、本コースは3年連続で全体よりかなり低い。しかし、設問[A]の平均値は大学全体(3.6)よりも大きく(4.2)、設問[B]の平均値は大学全体(3.9)とほぼ同じ(3.8)である。本コースの学生は、総合評価の捉え方が異なっているようである。

設問[A]「本学での大学院生活をとおして、あなたは次のような知識や能力などをどの程度獲得したと思いますか?」については、全項目の平均値は、2021→2022→2023 年度で 3.8→3.5→4.2 と推移しており、2022 年度に低下した値が上昇した。他の項目に比べると、「8 国際的な視野」の評価が低く(3.8, 3.5, 3.5)、これは例年の傾向であり、本コースの今後の重要な課題である。また、「1 幅広い分野にわたる教養」の平均値も低い(3.5)。これは、2022 年度からの傾向である。なお、この設問の自由記述の回答はなかった。

設問[B]「本学での大学院教育を振り返り、以下の授業科目群や設備・機器などについて全体的に評価してください。」については、全項目の平均値は、2021→2022→2023 年度で 3.8→3.5→3.8 と推移しており、2022 年度に低下した値が上昇した。2022年度からの上昇の大きい項目は、「2 発表や質疑応答を伴う演習形式の授業」(3.1→4.3)、「4 研究やゼミにおける指導」(3.5→4.3)である。これらは、コロナ禍による授業形態や研究室運営の変化による低下から元に戻ったものと推測される。一方、2022 年度からの低下の大きい項目は、「12 学務課／四條畷学務課 事務サービス」(3.8→3.0)で、回答した 4 人のうち 2 人が評価 2 を付けている。この設問の自由記述の回答はなかったため、詳細はわからないが、大学院生が事務サービスに不満を持っていたのは明らかである。

設問[A][B]において、2023 年度は、回答数が 4 しかなく、また、2022 年度に比べると極端に低い獲得度や評価にした学生がいなかったため、平均値が回復した項目が多い。

自由記述には、肯定的な内容が多かったが、改善を求めるような内容で具体的なものとして以下があった。

- オンライン授業を多くする
- 担当の教授が急に退職してしまった点
- 研究として他学科との連携の上行うことができればより幅広い研究ができるのではないかと感じた
- 授業のオンラインの増加 講義の時間を 5 限から 2、3 限に変更してほしい

大学に長く在籍した修了生の声にはしっかりと耳を傾ける必要がある。

2023 年度修了生満足度調査結果検討報告書

2024 年 6 月 17 日
医療福祉工学研究科 医療福祉工学専攻
2023 年度主任 田中 則子

設問[A]本学での大学院生活を通して獲得した知識や能力においては、ほとんどの項目で4.0以上と高い結果であった。特に、昨年度の振り返りで課題とした「1 幅広い分野にわたる教養」、「10. リーダーシップ」を含め、「7 困難に直面してもそれに対処していく力」や「12 新たな課題を発掘して解決していく創造力」の項目において、昨年度よりもポイントが向上できていたのはよかった。一方、「8 国際的な視野」の設問においては、「a 国際的な視野(専門分野)」「b 国際的な視野(異文化理解)」「c 国際的な視野(国際交流)」の各細目ともに 2.7～3.4 の範囲となっており、他の項目に比して低値を示していた。今後は、さらに学生が国際的な情報や活動に触れる機会を増やして、知識や交流を広げる工夫をしていきたい。

設問[B]本学での大学院教育(授業科目群、設備・機器など)においては、すべて 4.0 以上となっており、平均 4.3 で昨年度よりも 0.2 ポイント向上していた。その中でも、「1 講義形式の授業」「8 講義室等の映像・教材提示装置等の充実度」は前年度(3.6～3.7)に比して 0.7～0.8 ポイントの向上がみられており、改善が確認できた。全体の中で比較的点数が低値であった「5 図書館の図書・雑誌等の充実度」や「11 大学院履修要覧などの諸資料」「12,13 事務サービス」について、専攻内の各担当教員および事務部門と協力して、さらなる充実にむけて努めていきたい。

設問 [C]本学での大学院教育に対する総合評価は 8.7ポイントで、大学院全体のポイントよりも高値を示していた。自由記載欄には、知識や経験、プレゼンテーション能力の獲得など、学生の成長が感じられる記載が多く、各教員が個々の学生指導に取り組んできた成果と考えられた。しかし、前年度の医療福祉工学専攻総合評価9.7と比較すると 1.0 ポイント低下していた。[A][B]で課題であった「国際的な視野の活動」や各種サービス、自由記載欄に複数意見があった「学部生との交流」や「他学との交流」についても、今後の充実にむけて検討していきたい。

■参考

当報告書と合わせ下記の資料が参考となることを、添えておきます。

『教育基本3方針（ポリシー）』

【大学】 <https://www.osakac.ac.jp/about/policy/faculty/>

【大学院】 <https://www.osakac.ac.jp/examinee/graduate-exam/policy/>

2024年6月

教育開発推進センター

寝屋川キャンパスA号館1F

〒572-8530 寝屋川市初町18-8・内線：3129